

連
句

猫蓑作品集
XIII







序

「猫蓑作品Ⅻ」は平成十四年十二月に、猫蓑会会員から投稿された連句作品七十九巻を収録したものである。会員数の増加により一人一巻に制限して寄せられた作品であり、これを見ると猫蓑会および会員各位のこの一年間の活動の大勢を俯瞰することができるであろう。

収録した作品数は歌仙二十七巻、源心十三巻、二十韻十巻、半歌仙二十七巻、その他二巻、計七十九巻で、前年と同数になった。内訳をみると歌仙、二十韻が減少、半歌仙が大幅に増加している。半歌仙の中には国民文化祭の「鳥取県知事賞」受賞作品、全国連句新庄大会「ブレ大会特別賞」受賞作品も含まれるが、増加の理由の第一は新しく作品集に投稿された方が多いことである。猫蓑会会員の底辺が拡大していることは喜ばしいことである。

猫蓑会の特徴のひとつは、会員を中心とした連句実作の会が数多く存在し、一座としての連句創作活動が活発なことである。猫蓑会の例会を含めて、少なくとも年間五百巻を上回る連句作品を創作する連句結社・グループは他には存在しないであろう。猫

蓑会には「明雅先生の教え」を先輩が後輩に伝え、指導するよき伝統がある。このような風土の中で連句の基礎を身につけ、連衆心を養うことができる私たちは幸せである。

また、この作品集には猫蓑会会員同士で巻いた作品だけでなく、会員以外の連衆を交えて巻いた作品が増加していることが目につく。新しい連句人の開拓や他流との交流にも意味があると思われる。

このたび、明雅先生は猫蓑会会長職を引退する意向を表明され、私が会長職を引き継ぐことになった。会運営の雑務から開放される明雅先生には、気ままに連句を楽しむでいただきたいと思う。作品集に投稿された作品はこれからも事前に先生に目を通していただくようにしたい。会員のみなさまには、今日より明日の心がけて一層の精進を期待している。

最後に、本号の編集・出版に努力された方々、校正の労をとられた方々に深く感謝申し上げます次第である。

平成十五年二月二日

青木 秀樹

蓮根掘 …………… 吉藤とり子 捌 60

源心

己が影 …………… 梅田 利子 捌 64

ポケットの穴 …………… 金久保淑子 捌 66

ところてん …………… 倉本 路子 捌 68

昼 蛙 …………… 篠原 達子 捌 70

白雲や …………… 杉山 壽子 捌 72

雪しぐれ …………… 鈴木千恵子 捌 74

風のホイッスル …………… 鈴木美奈子 捌 76

星飛ぶや …………… 副島久美子 捌 78

香具師の声 …………… 棚町 未悠 捌 80

三伏や …………… 長崎 和代 捌 82

蒼き鏡 …………… 百武 冬乃 捌 84

水煙草 …………… 吉村ゑみこ 捌 86

久闊を …………… 若林 文伸 捌 88

二十韻

翁の日 …………… 浅賀 丁那 捌 92

藤浪や …………… 木村 真呂 捌 94

心地よき …………… くの あや 捌 96

春の闇 …………… 島村 暁巳 捌 98

にぎやかな町 …………… 高橋 豊美 捌 100

白玉楼 …………… 橘 朱鷺子 捌 102

江の海 …………… 橋野代々子 捌 104

初時雨 …………… 松原 弘子 捌 106

師走空 …………… 峯田 政志 捌 108

長旅の象 …………… 横山 わこ 捌 110

半歌仙

木魂に明る …………… 稲垣 渥子 捌 114

夏の月 …………… 加藤 治子 捌 116

水琴の …………… 金山征以子 捌 118

草の笛	小春かな	豊 鯛	年の垢	武相荘	ほがらな面	初 旦	秋の蝶	地虫みち	夾竹桃	樟若葉	猫のつそりと	梅雨寒や	芥吹かるる	菊の酒	月影の尾	草 苳
.....
松島アンズ	間瀬 芙美	伴野 末季	登坂かりん	難波さえこ	生田日常義	中森美保子	中村 ふみ	中林 あや	長坂 節子	谷本 守枝	武村 利子	高瀬 美保	鈴木 了斎	五味 蓉子	小池 啓子	黒木美代子
捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌	捌
152	150	148	146	144	142	140	138	136	134	132	130	128	126	124	122	120

あとがき	発句 モジリアーニの	ささめ雪	蛩の光	表合せ	雪 婆 <small>ほんば</small>	蝮の裔	今朝の冬	真夜の月	神 馬	たびら雪
.....
下鉢 清子	秋元 正江	秋元 正江	小野 芳梅		山崎 一恵	山口 美恵	山口佐喜子	矢崎 藍	宮川 侑子	松本 碧
捌	捌	捌	捌		捌	捌	捌	捌	捌	捌
172	171	170	168		166	164	162	160	158	154

連句 14

𠃉
歌

仙
𠃉

初しぐれ

東 明雅 捌

詩心を包む便りや初しぐれ

すする蕎麦湯のほのかなる香かき

山守の鳥の声音を聞きわけて

お晩がすとお譲るなり

真赤な月掲げ客なき大ホテル

ゴブラン織りのやや寒の椅子

栗飯をまづ召されよとばば様ウに

小町娘も見合疲れか

NGO君思ひつつ井戸を掘り

駱駝に乗って空を行く夢

南華経千年の謎みな解けて

独白居士はぬる風呂の中

対岸の藪はさながら蛍籠

予備校休む夏瘦せの月

雲水の今日の宿りも見付らず

ジャンケンしようとならぬ子が来る

ひと蹴りのボールの払ふ花吹雪

春の別れも人の別れも

日 東 日
高 高 英
明

雅 玲 二 雅 玲 二 玲 雅 二 玲 雅 二 玲 雅 二 玲 雅 二 玲 雅 二

ナオ

舟歌の沖より霞む夕間暮

運河に落す窓の洗濯

アル中になりてより世は鬼ばかり

描くモデルのみな母に似る

さよならも言はずお前は出て行つた

鱗一枚残る抱籠

でんでんと祭を告げる大大鼓

異邦の友と通り町練る

ノーベル賞思ひもかけず受ける身に

またも肌着の前後ろなり

律儀にも月の追ひ来る寝台車

漱石先生修善寺の秋

ナウ

とろろ汁胃の腑にするり納まりぬ

ラーゲリの日の遙かなること

冬の果水の流るる石畳

おひねりを撒く店舗落成

花に酔ひ浮世の憂さはみな忘れ

蝶と舞へるも現なるべし

平成十四年十一月十五日 起首

平成十四年十二月十日 満尾

執筆 雅 玲 雅 二 玲 雅 二 玲 雅 玲 二 雅 玲 二 雅 玲 二

仏足石

青木 泉子 捌

春星の爆せて仏足石にかな

根を張らせつつ潜む草萌

紙風船小さく息を吹き込みて

面相筆の運び滑らか

液晶の海より月の昇るらむ

音合はせする虫のコーラス

苔桃をリカーの瓶にたつぷりと

裏木戸開けて覗く碁敵

待つことがいつしか癖である夜さり

魔女の試験に落ちてそれから

手作りのびっくり箱に夢幾多

軒の干鮭海の香りす

凍て月が青白く染め八甲田

オイルたつぷり撃鉄に差し

メビウスの帯に書き込むメッセージ

どこまで続くπの計算

横笛の届く限りの花の枝

川底深く田螺眠らせ

佛 淵 健
渡 部 葉
山 本 要
鈴 木 了
青 木 泉

悟 子 斎 月 泉 斎 月 要 月 悟 斎 泉 要 悟 子 斎 月 悟

ナオ

仔猫抱き巡回映画待つてゐる

マッキントッシュの襟の立て方

白壁の家びつしりと迷路なす

捜査線上浮かぶX

雷神の太鼓のリズム真似てみむ

こころ模様はふつと変はりて

いい人を下戸と知りつつ苛め抜く

ええいあんたの初心が面憎

蜜蝋のほのと漂ふ甘き香に

甲板に寝て風を待つ夕

乾杯のグラス合はせる宵月夜

何でも馴染むうるかはららご

脇腹にまたも秋思が棲みついで

治りきらない疱疹の痕

ホメロスは吟遊詩人のはじめとか

テノール朗々暮れかかる丘

花浴びて機械仕掛けの車椅子

炬燵塞ぎし部屋の広々

平成十四年二月十四日 起首

平成十四年三月十三日 満尾

於 青木泉水宅 インターネット連句座

斎 悟 要 泉 月 斎 泉 要 悟 月 斎 悟 泉 要 月 斎 泉 悟

冷酒や

青木 秀樹 捌

冷酒や蓮の臺の心地よき

蜻蛉生まるる池の静寂

ギターデュオ軽くトレモロ響かせて

ゼリービーンズつまむ幕間

昼の月階段多き坂のぼる

秋の扇を飾る店先

北嵯峨の蜥蜴も穴に入る頃か

丸めた頭隠す逢引

極道の見せる弱さが可愛くて

残す勇気と捨てる決断

賞味期限二度も三度もリセットし

突然熄みし島の長雨

舟起し大漁旗に細き月

鷹と鷹匠強き目差

日本年親善使節ピレネーに

おむすびに海苔つけるわびさび

喚声は早朝野球花万朶

ベンチの下で仔猫鳴きたる

青木 秀樹
古賀 一郎
八代 千恵子
鈴木 千恵子
山崎 一恵
武村 利子

千利 惠 千利 惠

ナオ

かげろふに国会議事堂ゆらめきて

電飾看板たてに取りつけ

人形の脚線美見せ運ばれる

ハンニバル將軍黒き眼帯

ヨーデルの咽ぶがごとく呼ぶ乙女

二貫の鮎のやうに添ひたい

びんびんとはねる小枝の矯めやすく

びくともしない司令塔なり

後ろにはムハマド様がいらつしやる

何でもいいのちよつと休憩

月の客国債談義きりもなし

台風一過すべてご破算

放屁虫逃げる構へで窺つて

磁石の針で真南を知る

リモコンのロボットでする対校戦

園児お絵描き春動き出す

この山の花は今年も咲き満ちて

耕して読む歳のとりかた

執筆 樹千恵千郎利嫻恵郎同嫻千郎恵利恵郎

平成十四年六月十六日 首尾
於 東郷神社和楽殿

無限聴く

池田やすこ 捌

虫籠に広き野原の無限聴く

雲の絶え間を白き眉月

新蕎麦粉こねてのばして刻むらん

拍子抜けするニユース速報

寄り合ひて祭用意の公民館

日焼けの色を競ふ童わらわんべ

^ウ着任の先生わつと取り囲み

下宿訪ねる理由探して

「年の差は気にならないわ」にドギマギし

目札されてはて誰だっけ

県民は不在理念のない選挙

信濃の誇る山と湖

月揺れて熱燗の盃きゆつと干す

狸の罟を仕掛け終へたる

裏庭に木地師の墓のひっそりと

やりくり上手うちの大黒

縮緬の感触うれし花衣

音符のやうにチューリップ咲く

村山 加津枝

水谷 紀明

松本 碧

池田 やすこ

明

枝

枝

同

枝

明

枝

碧

枝

碧

明

枝

こ

枝

ナオ

かぎろへる跳ね橋の下ゆく小舟

明日は十三日の金曜

モンスタ―集合場所はロンドン塔

からす鳥語すずめ雀語

古盥久々登場行水す

腰を伸ばして払ふ蜘蛛の巣

歩き方まで習ひたりジム通ひ

教へなくても恋は上達

いつまでも源氏の君と呼ばれたし

とどのつまりの俳句三昧

出港の船団に月皓々と

ナウ

流星群に夢託す人

襲名を控へ楽屋に菊香る

ビデオに残す代々の猫

路面電車継目のリズムなつかしみ

雪解け水はちろんてんとん

しばらくは花に抱かれて旅靴

うからやからの揃ふどんたく

枝明同こ枝こ枝明こ枝こ同明枝こ同枝明

平成十四年八月三十一日 首尾
於 大倉山連句会

木橋白く

市野沢弘子 捌

木橋白く枯葦白く続きけり

あたりふはりと舞へる綿虫

借り受けし二胡の響きを試しゐて

箱形に折る広告の紙

マヌカンと月光分つデザイナー

長距離電話秋も酣

金刀比羅祭奉納芝居幡なびき

うなじに立ちし梅檀の香

咬み痕をちよつと見せたい気もありて

ぬるいミルクのやうな幸せ

故郷の山河は夏も寒からん

青鷺数羽月の楊柳

変身にしても変はらぬDNA

神さま僕はまた嘘をつく

人の字の人形塚のやさしげに

シャンパン抜きて祝ふ誕生

ポロネーズ踊れば花の肩に降り

赤い自転車柔東風の中

市野沢弘子

原田千町

青木泉子

坂本孝子

鈴木美奈子

古賀一郎

奈町

泉町

孝町

孝町

泉町

孝郎

奈郎

義郎

生田目常

生田目常

生田目常

生田目常

十五夜

内田 麻子 捌

十五夜や昔むかしの夢を見る

濃き藍色の深山竜膽

ベランダに声にぎやかな小鳥来て

哺乳瓶に手添へる幼児

無人駅車掌に切符渡す客

そよりともせぬ夏野広がり

注文の粽たつぷり蒸し上げて

今は珍し四郎六郎

縁談の末から順に決まりゆく

名古屋の嫁荷入らぬマンション

更地出来有刺鉄線街角に

雪降る頃か故郷の山

婆様は猫に物言ふ寒の月

何の終りかピーと鳴る音

パソコンとオーディオ人に触れさせず

年号暗記兄大試験

靖国の鳥居もかすむ花吹雪

ネーブルオレンジ齧る石段

内田 麻子
高瀬 美保
市野 弘子
八角 澄子
上月 淳子
山口 みづゑ

弘 淳 保 淳 保 弘 澄 弘 麻 保 弘 澄

ナオ

カメラアイ煙の上がる春の島

日朝交渉首相やつれて

忘れないけれども許す他はなし

ルージュの紅か志野のぐい呑み

ウインクも確りとどく講義中

羅の胸つんと尖らせ

ちまちまと暮らす男にがさつ妻

寿限無寿限無でなべてすり切れ

張つてゐる刑事にパンの差入れし

町医者けふも明日も休診

月明り疎林に遊ぶ水の精

ナウ コロボックルも踊るひよんの実

母作る糞虫バッグ今も在り

絵手紙教室いそいそと行く

寝坊して長電話受け大遅刻

水車が土を砕く窯元

お茶杓の銘は涙よ花筵

種浸すとして開ける倉の戸

平成十四年九月二十六日 首尾

於 梶が谷房連庵

保 淳 保 同 麻 保 澄 淳 保 同 保 澄 弘 淳 麻 弘 保 淳 保

いぬふぐり

久保田庸子 捌

日を集め古都裏道のいぬふぐり

笑顔晴れやか入学の子等

春眠の覚めやらぬ目を遊ばせて

ピアノの音色隣家より洩れ

月天心離宮の庭の苔の艶

汐入池を渡る秋風

酒顔雁来たかと父は酒を酌み

バースデイ問ひ贈るネクタイ

ペアルックハワイへ行かうハネムーン

火山の煙また立ち登る

どらやきをくはへいづこへどらえもん

老ホームレスサルトルを読む

懺悔台額づきてをり寒月光

大雪原に続く櫓跡

ピストルと青酸加里を渡される

操るロボット手足くねらす

花枝垂れお地蔵様に触れさうな

開園記念日飛ばす風船

久保田 庸子

壱岐 幸子

加藤 さくら

小阪 博子

稲葉 建子

庸子

同

幸博

ら

建

幸

ら

幸

庸

幸

建

子

木暮 淑子

ナオ

のどやかに棹撓らせて渡守

自慢の喉に小節利かせる

大銀行ATMはバンクして

主婦行列の安売りの店

斧上げるかまきりの子と睨めっこ

葎簀の陰に済ます昼飯

棟梁はしばしばまどろむ肘枕

小町娘はいつか毒婦に

シーサイド相乗りバイク疾走す

声高く来てお見舞の客

太郎杉次郎杉とて月清し

鹿鳴く庵夢のいくばく

ナウ
おけさ柿甘くなりしとメールする

孫に伝へる鬼太鼓の撥

夕映にゆるゆる回る観覧車

買物帰り雑踏の街

植ゑ継がる美濃の桜の花を浴び

展望台も暖かき頃

平成十四年二月二日 起首

平成十四年五月十八日 満尾

於 港区労働会館

幸 庸 ら 博 淑 幸 博 同 ら 淑 庸 幸 建 ら 建 博 淑 幸

笹野観音

桑原 美津 捌

笹野観音守る能面師蘭の秋*

添水のたつるおとの寂々

月の出にお伽話を語りゐて

レトルトカレー鍋であたため

ピッケルの黄色いリボン目印に

黙し続きぬ海霧の捲く山

桑港に棲みつく猫と化学者と

乱数式のデート暗号

十一桁住民票で入籍し

鳥の会やら謡の会やら

お勤めをしてる顔して足早に

新宿西口月の冴えたる

ノール賞貫へぬだろが袴の儀

調子に乗って梯子酒して

一年で離党しますと啖呵切り

轆轤がまはる歪なる壺

甘噛みのライオン包む花吹雪

中折れ帽を飛ばす春風

桑原美津

浅賀丁那

久保田庸子

下鉢清子

鈴木美奈子

津

那

庸

清

奈

津

那

庸

清

奈

津

清

那

ナオ
仰ぎ見る機体の童画のどかなり

ポラーノ広場響く指笛

ライン際サーブ決って大歓声

監督だけが知ってゐる癖

霍乱の全快のあと呆けだし

溽暑続きて章魚も寝不足

乃木坂に千人斬の網タイツ

時計はづせば男代って

夢ぬちに翼に傷負ふ天使頭れ

昔の味のキャラメルがよい

茶立虫静かな刻を分ち合ひ

ナウ
竹垣低く色変へぬ松

月の舟アンモナイトは海を恋ふ

流離人と我名呼ばれん

印伝の財布の中は小銭だけ

思ひ出いっぱい詰まる抽出

山彦の答へて遙か花の雲

歌に詠まるる美しき貌鳥

*笹野観音…山形県米沢市郊外にある寺。葺屋根の鴟尾のかわりに

能面・翁の面・般若の面が揚がっている。

奈 津 清 庸 那 奈 清 津 庸 那 津 奈 清 庸 那 津 奈 庸

平成十四年十月十三日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

金色の海

上月 淳子 捌

鶴来る海金色に輝けり

冬の虹出てあがる歓声

弓始きりりと的を射抜くらん

国宝となる発掘の碗

不意の客対面キッチン月さして

銀木屋の香話題に

^ウ赤い羽根帽子につけて帰ってくる

角を曲れば懐しき家

気の置けぬ仲がいつしか特別に

声を掛けても横をむく猫

これからは塵芥^{ゴミ}も十二に分けるとか

^{*}ベロタクシーで表参道

月涼しピアガーデンで乾杯し

左遷の部下に贈る熟鮓

老眼鏡忸怩の二文字探してる

また診察に通ふ早朝

花筏靄晴れゆけば渺々と

豆凧いつか空に消えたり

上月 淳子
間佐紀子
橋野代々子
島村暁巳
西田一巳

巳紀同巳紀代枝同代枝紀巳枝巳

迷ひ海豹

近藤 守男 捌

多摩川に迷ひ海豹秋うらら

新たに涼し子らの呼び声

望の月名画のテープ借りて来て

高速道路今日も渋滞

坂がちの街に重なる赤き屋根

非番の巡查サングラスかけ

神輿昇腕のタトウの際やかに

愛が始まるまでのときめき

燃えてゆく行方も知れぬ母系の血

シラノの鼻がびくびくとなり

笛吹のここで二度目のフェルマータ

請はれぬ評を長々とする

文旦の切口匂ふ土佐の月

着馴れしジャンパー肩に来る香具師

教へない言葉ばかりを鸚鵡めが

体操教室空きを待ちをり

とこしへに咲き継ぐ花を究む日々

鳴かず飛ばずに枝の春蟬

橘 朱鷺子

峯 田 政 志

山 口 美 恵

式 田 恭 子

浅 賀 丁 那

近 藤 守 男

志 男

恭 朱

恵 朱

那 同

那 同

恵 同

朱 同

恵 同

恭 同

同 同

志 同

同 同

太子忌の貝さまさまの形して

乳母車の嬰かぎろひの中

湘南のトンビ暴走かしましく

都知事の強気いつもはらはら

温暖化地球環境異状態

こつくりさんが今日は不機嫌

夏富士の頂上鳥居くぐりたり

気付けの酒を妻が差出し

A・I・Dやむを得ないと聞かされて

現夫元夫も同じO型

月皓皓鍋にバスタの吹きこぼれ

皿の葡萄を描く徒然

縁先の^{ナウ}拌み太郎とにらめっこ

二両列車がV字谷降り

ララバイに一番星は瞬きぬ

ジプシーの夢覗くライオン

釣人の浮子包み込む花筏

露天の風呂に浸る永日

*湘南のトンビ…暴走族の架空名

**A・I・D…人工授精

志男 惠同 那男 朱那 惠志 惠志 惠同 朱志 朱那

平成十四年八月二十九日 首尾
於 くりの会

一重の声

権頭 和弥 捌

こほろぎの一重の声となりけり

月にめでらる宗匠の句碑

走り蕎麦彫り深き手のとく打ちて

教養講座はやるこの頃

冷房を出れば街中ただ暑し

夾竹桃の紅が目に沁む

古^ウびたる郵便ポスト役場前

不倫の旅は猫に鈴付け

天平の弁天に似し肌あらは

いつのまにやらあけし酒瓶

銀行の破産心配するでなし

ッきよし^ッの演歌やつと覚える

綿虫を大きく舞はせ昼の月

雪吊り終る城址公園

ニユートリノ嘘も真も通り抜け

三兄弟は口笛を吹く

千年の歴史をたどる花大樹

中条の里種子を浸せる

権頭 和弥

渡部 春水

小川 広道

磯直 道

三井 佐恵

高橋 たかえ

福田 太郎

福田 太郎

道 恵

道 恵

え 恵

え 恵

水 弥

水 弥

道 恵

道 恵

え 恵

え 恵

ナオ

デパートの屋上めぐる初燕

餓鬼大将はブリキサーベル

傍らに投げ捨てられし松葉杖

日和見議員離党入党

白玉はやはりするりと食べるもの

海を遠見に茶屋の絵簾

ブラウスの胸のふくらみ忘れず

な、なんと彼女空手黒帯

東西と南船北馬忙しく

ポケットにある硬貨がちやがちや

自動ドアくるり望月輝きて

ナウ
芸術祭で受ける大賞

両肩の雨降り払ひ菊の珠

母が遺せし箏に置く駒

時刻表貼られしままの廊の先

遠足の児等丘に迎へる

初花に仲良きことは美しき

さくら緘に染まる瀬頭

平成十四年十月十三日 首尾

於 熊谷市上中条 龍智山常光院

水を道に恵み男水に恵み道水に恵み男水に恵み道水に恵み男水に恵み

秋麗の蝶

坂本 孝子 捌

秋麗の別れては逢ふ黄蝶かな

曼珠沙華咲く前栽の隅

新米の香り嬉しく月待ちて

ボサノバで踏む靴の軽やか

弟はなんでも兄のまねばかり

汚れた犬を拾ふ夕立

鍋祭り重ねて被く紙の鍋

愛のメールがまだ二、三通

工作船謎はいよいよ暴かれて

乳酸菌の殖え続けたる

学会の発表がてら出づる旅

寒月欠けて漸悟する僧

迫りくる天領の山冬木立

待った待てぬと碁仇と吾

大切なもの入れてゐる小引出し

ろくろっ首がよろによろと伸び

俯瞰図のごとき洛中花の雲

舞の扇を選ぶ永き日

坂本 孝子

難波 さえ子

根津 忠史

鈴木 千恵子

関口 靖子

千野 浩一

恵史

同史

同恵

一恵

同史

史

え史

靖史

靖史

史

靖史

え史

春休^{ナオ}み話題の映画存分に

寿司屋が眉を寄せるマヨラー

「海」の中に「母」が棲んでた旧漢字

星座を仰ぐ島の砂浜

横綱の迷ひふつ切れ夏場所に

宿酔には何よりも酒

打って買ふ金も用立ついい女房

だってあなたは初恋の人

ケセラセラ屋根の上には風見鶏

待つてるバスは来ないバス停

鳴砂山野辺の送りを月照らし

かかしの肩にかけるパシユミナ

冬隣特許の権利誰のもの

錬金術は人類の夢

健やかにゴルフの素振りして傘寿

柱時計のねちを忘れず

花爛漫落語長屋の盛り上がり

市場にどっとカクトビの糶

平成十四年十月六日 首尾

於 深川教室

靖孝史靖同惠史え靖同え惠一同史同惠同

ナオ

炬塞ぎに伊羅保の盃を取り出して

字引で当たる拉致といふ文字

電池切れ頭の回路つながらず

ビタミンEの取り過ぎは駄目

泡盛を三線ライブの居酒屋で

ほれたあの娘に染める紅型

初時雨すこしからげて左袂

抱かれてみたいあなたドラキユラ

小銭持ちほっくり寺に婆の列

鳩飛び立たすぶちの野良犬

風生れし池面に月のゆらめきて

柚味噌に箸を遊ばせる鬱

ナウ
勿頭の友と疎開の秋尋ね

八面玲瓏富士は尊し

わが町のエコ宣言に賛同す

春の霰に店の番傘

花万朶笑みのこぼるる四世代

乗込鮒のひそむ川隈

*無言館…信州上田にある戦没画学生の遺作ギャラリー
*エフェンス…アルテミス女神像が出土した古代都市。クレオパト

ラとアントニオがつかのまの恋に耽ったとされる。

英 泉 英 淑 啓 淑 英 啓 泉 淑 啓 英 同 淑 啓 淑 英 泉 英

平成十四年十月三十日 首尾
於 東京ウイメンズプラザ

梅雨めぐる 式田 恭子 捌

開けぬまま換へる煙草や梅雨めぐる

とうすみ蜻蛉すいと肩先

ビー玉の色さまざまにちらばりて

親子奏でる一絃の琴

高階のお席へ月と昇りつめ

少し遅れて冬支度など

^ウ東京の東西南北木の実降る

とさか頭が闊歩する街

恋人をアイテム別で取り揃へ

バッグを売って貢ぐ本命

静電気帯びた裏地のまとひつき

また増えてゐる指のささくれ

千社札鳥居に貼られ冬の月

げそに熱爛話尽きない

国債の格下げ無視の永田町

風に毀れて止まぬ砂山

花吹雪声の遠くへ去りゆきて

かくれんぼする囀の中

式田 恭子
 鈴木 美奈子
 鈴木 了齋
 花巻 珠枝
 川名 将義
 村山 加津枝
 中村 ふみ

奈義 加齋 同 義 奈 齋 枝 同

若鮎ナオの形ナオを写せし菓子包む

冒險野郎ひとり行く旅

プチホテルノートパソコンすぐつなぎ

オークションならあれも買へるよ

ぞっとする咄の後のかき氷

蛇の脱殻石垣にあり

日焼した素足まふしき島娘

巡回医師の嬰を孕みし

縁側に猫専用の赤おざぶ

さうかさうかと八丁ひとの女

寝て待てば月はかならず照らすもの

秋場所ナウまでに幕内昇進

小粒ナウにてびりりと辛き唐辛子

茅葺きいぶす煙たなびき

藍染の作務衣が似合ふ父の背

イヤホンで聴くタンゴピアソラ

訪ね来し津軽の花と舟に乗り

なすべきことをなして春興

平成十四年六月十六日 首尾

於 原宿東郷神社 猫養同人会桃径庵和子宗匠一周忌興行

加 恭 奈 同 み 枝 奈 斎 義 加 奈 斎 み 義 加 奈 枝 斎

朝顔市

下鉢 清子 捌

朝顔市団十郎といふ鉢も

麻着て渡る橋のかずかず

インターネット航空券を予約して

新型掃除機動くフロアー

ちぎり絵の教師あくびす窓の月

子らの鞆にたまるとんぐり

蠨螂がばったを屠る草蔭に

失職の知事またも選んで

天秤の右と左に君と僕

ハートの隅に発破かかへる

ミステリー好きが昂じて無人島

冴月を浴び海鳥の群

行軍のざわめきを消す虎落笛

帝都タクシー手を上げて呼ぶ

九品仏等々力溪谷間近なり

民芸品の並ぶ店先

花受ける釉葉黒さ杯に

琴の調べを春風に聞く

下鉢 清子
鈴木了斎
副島久美子
杉山壽子
青木秀樹
山本要子

久斎樹 久斎樹 久要樹 久斎子

ナオ

淡雪を踏み山の辺の通学路

愚弟愚妹に兄のため息

ベッカムの髪を真似して笑はれる

ハードディスクに保存する詩

たちまちに消えてしまった夢と夢

影に溺れるやうな向日葵

盛装の君のオーラに目の眩む

初心がかはゆい歳下の奴

南仏の古城址に棲む吸血鬼

脂肪太りで穿けぬスパッツ

月世界パントマイムで語る女

汁ナウしたたらせ蔓荔枝食む

残る蚊を猫はしつぽで追ひ払ふ

昔とつたる杵柄で生き

先生はいつも元気で早起きし

ワンツー・ワンツー弾むゴム毬

嶺の花つづれる曾良の随行記

越の渚に拾ふ紅貝

平成十四年七月十七日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

齋 清 壽 樹 壽 樹 久 要 壽 要 齋 久 齋 壽 齋 樹 要 壽

ナオ

世の末を田螺つぶやく鄙の午後

楊枝削りもベテランとなる

禁煙もはや一年の大台に

人事異動の噂飛び交ひ

街の灯にまじってゆれる狐の火

プチ整形で高くせし鼻

物惜しみせぬおばさまをパトロンに

蓮の台で眠る約束

あつけらかんと下駄をとばしてあすは吉

大リーグへと松井去りゆく

バイブリッジ真夜中の月皓々と

ナウ

運河の壁を伝ふ蟋蟀

張込みもこれが最後と秋惜しむ

趣味の埴輪のことが気になり

厨房をとめてばかりのメカオンチ

翔び立ちさうな折鶴の羽

花蔭に音合はせする提琴バイオリン

のどかな笑ひひびく山々

平成十四年十二月八日 首尾

於 柏市光ヶ丘近隣センター

ズ 悟 利 雅 美 悟 ズ 美 雅 利 悟 ズ 雅 美 利 悟 ズ 雅

ダチユラの蕾

豊田 好敏 捌

根分けせしダチユラの蕾ふくらみぬ

縮浴衣を通りゆく風

水鶏きく白磁の皿を磨きあて

アップで撮りしみどり児の顔

北流す大河ゆつたり月の下

崩れ梁より泳ぎ出す魚

演^{うだ}し物は阿^あ弋^て流^る為^いとなる秋芝居

勝者は悲し敗者よりまた

いつになくやさしくなれる君の膝

心ならずもカッブルとなり

さながらに現代戦争W杯

金髪茶髪街に溢れる

雪月夜猫とテレビを観る媼

塩汁鍋のふつふつと煮ゆ

東京へ行くと言ひはる次男坊

通信販売あてもなく買ひ

海^{**}見ゆる墓苑ぐるりと花の雲

や^{**}つとかめやなも蜆豊漁

良	や	要	や	良	女	要	彌	良	要	や	良	子	彌	池	本	繁	豊		
														山	佐	池	本	繁	豊
														本	藤	田	屋	原	田
														要	良	や	良	敏	好
														子	彌	す	子	女	敏
														彌	彌	こ	女	女	敏

ナオ
おやこ

風作る父子に稀な日曜日

家事の分担平等にして

たちまちにゴミ食べ尽くすバクテリア

地球に少し増えすぎし人

江戸切子銘酒こもごも酌み交し

青簾越し湯浴みする背

還曆に初めて知りし恋の味

佐助みたいな男欲しいの

甲高くシンセサイザー響ききて

あとひと息で写経千巻

眠られぬ配所の月の有処

ナウ
露ふくむ草馬にたつぷり

かき分けてべつたら市の群の中

ちんと水洩かんだ半纏

よみがへる汽笛一声ステーション

阿蘭陀渡る髭のキャピタン

花の中最後の打者も凡退し

上手に歳をとりてうららか

*阿豆流為…坂上田村麿に亡ぼされた陸奥のえみしの頭目
**やつとかめやなも…「久し振りだね」の名古屋方言

平成十四年六月十六日 首尾

於 東郷神社

良 敏 良 要 女 良 同 や 彌 要 女 良 要 彌 や 敏 要 良

十二月八日

中田あかり 捌

十二月八日業火と卦が出でむ

遠く近くに寒猿の声

水墨の余白絵筆を遊ばせて

暇さへあればギター爪弾く

初めてのお使ひの子に月上る

中抜大根袋より首

爽籟ウの彼方に穂高聳え立ち

せせらぎの如続くささやき

若すぎて眩しき人の喉佛

新丸ビルを見物の群

平和呆け三度の飯に命かけ

連日連夜地ビールの月

大好きな喧嘩祭を待ちかねて

揃ひの衣裳しかと縫ひ留め

珊瑚礁蛇皮線の音の響き来る

ペットの仔ブタ店でシャンプー

真打の粋な手拭花吹雪

小路小路に烟る春霖

中田あかり

久保田庸子

河内薫子

東明雅子

明雅子

ナオ

初虹はためいき橋にかかりぬて

プロフエツサーは足を曳きざり

億といふもちつけぬ金贈らるる

砂漠の駱駝水溜める瘤

不死鳥のよみがへる夢まざまざと

密教曼陀羅病室にはる

含羞のキスと微笑とあとヒミツ

「はやて」に乗って北へ駈け落ち

月影の古戦場あり平泉

芭蕉を偲ぶ秋蟬の唄

草泊バリヤフリーを計画し

蒸饅頭に和の字焼印

ナウ

舌鯀・蛸の刺身も添へさせて

エビキュリアンのくらし快適

乳母車なかに未来をそっと乗せ

可愛いお手々誰にでも振り

花の頃棋譜よむ声の凜として

書院の庭に陽ざしうららか

平成十四年十二月八日 首尾

於 柏市光ヶ丘近隣センター

*エビキュリアン…快樂主義者

薫 雅 子 り 薫 雅 り 子 雅 薫 子 り 薫 雅 り 子 雅 薫

*もじぎ
擬・時雨しぐれ

原田千町捌

時雨しぐれ見てきた里の話せよ

いづこも同じ山茶花の色

キーボード技の全てを教はりて

釣のフライの手入れ念入り

不知火を息ひそめ待つ丘の上

障子貼り了ふ軒深き家

村芝居笛の調べも賑やかに

ネールアートをちよつと自慢げ

空港のロビーで逢ふと云ひ捨てて

べそをかいても愛らしい君

九九暗唱あすは学校ずる休み

賢者の石の謎を知る鳥

月の下錫杖を突く富士行者

欠け椀に酌む甘酒の滋味

いよいよとなれば銀行国有化

門の衛兵微動だにせず

長髯の翁筆執り臥籠梅

野焼の煙ところどころに

原田千町
橋 朱鷺子
日 高 玲
林 鐵 男

玲同朱鐵朱鐵同玲鐵玲同鐵同朱男玲

ナオ

万愚節わたしほんとは宇宙人

卍を廻す円になるまで

町工場誇らしげなる作業服

餃子の店の長い行列

鷺鼻の女殺しに身を灼かれ

内腿にする蜘蛛の刺青

ひぐらしの遠く近くに呼び交す

名水ツアー宗祇忌の月

癩癖の父が称へる新走り

眼鏡修理はまだできてない

捕まへてみれば盗つ人国訛

ナウ

かんじき履いて替女の三味線

初年のサラブレッドの小屋覗く

南欧料理シェフを引き抜き

紺碧の海に乗りだす貨客船

同窓会はいつも出席

先の世の夢にも花の咲いてをり

常照皇寺暮れて行く春

*擬一花二月、初折の花は正花以外の花、月は折に一つ、秋の月は一度は詠むこと。

朱 町 朱 鐵 朱 玲 朱 玲 同 玲 同 朱 玲 朱 鐵 朱 玲 鐵 朱 町 朱 玲

平成十四年十二月一日 首尾
於 深川芭蕉庵

冬ざくら

東 郁子 捌

咲き満ちて一山寂と冬ざくら

北窓塞ぐ鄙の家々

インターネット調べだしたらきりもなし

手作りサンドちよつとつまんで

半輪の月さし渡る湖の上

子らの数へる初鴨の影

ウ 乗り継ぎのフランクフルトに惜しむ秋

ピアノ教師に焦がれ焦がれて

博物館誘はれたるも夢心地

稲荷横町横柄な猫

空巢あり緊急要す回覧板

新米刑事汗拭ふ月

更衣済んでも常の日なりけり

釣を楽しむ自家用の船

キム 金王朝民のかまどは知らぬげに

送電線に唸る電流

花便り研修中の息子より

晩学の書を開く春風

東 郁子
下 鉢 清 子
近 藤 守 男
鈴 木 美奈子

清 郁 守 奈 郁 清 奈 守 清 郁 守 奈 郁 清

湯の花や

日高 英一 捌

湯の花や老鷲ほどは唄ひ出せ

山の端に入る梅雨の雷

古文書の月の話に魅せられて

鍋より直に芋つまむなり

フリーター障子張替へ手際よき

おっとりとした灰色の猫

ウ
さざはしへ五体投地でにじり寄り

ボンネットバス鈴なりの人

ポケットに砂金の嵩をさぐるらん

ちびりちびりと小瓶傾け

君と逢ふ俄か作りの遊園地

涙が乾くまでは居なさい

時折は月影こぼす片時雨

門松並ぶ軒清げなり

一年中お早うをぢさん半ズボン

恩賜の時計腰にふら下げ

花の陰いづれに据ゑんさざれ石

太極拳でまねく初虹

日 鈴 式 佛 近 浅 日
高 木 田 淵 藤 賀 高
了 恭 健 守 丁 英

恭 悟 恭 男 玲 斎 同 那 恭 悟 男 玲 斎 子 悟 男 那 二

ナオ

姫虻が飛び込む麻布十番に

領事館には謎がいつぱい

魂と替へたる弾を銃に込め

野の白百合のやうな娘子

色褪せたポスターを背に独り酒

巡礼船の岸に着く頃

こんな時こんな所で高いびき

試験場にも嬰をおぶつて

新法は犯則金を倍増しに

月夜の柿の樹の下を掘れ

秋澄みてシヤガールの馬翔び立ちぬ

糸のアンテナたぐる蓑虫

寝てゐても街の流れが見えてゐる

看護婦の手をさする爺さま

居残りの校舎の影の長々と

どさりと届く郵便の束

夢の中母はいつでも花衣

鳴門若布をきざむ味噌汁

恭 玲 男 玲 男 悟 斎 那 英 男 悟 同 那 斎 英 玲 斎 悟

平成十四年六月十七日 首尾
於 草津・佳景亭

冬芽ぶき

日高 玲 捌

冬芽ぶきまだ葉のありし桜の木

ふくら雀の憩ふ軒先

甕底の名残の味噌のまろやかに

古文書の文字なぞるてのひら

月射して来て三線のフォルテシモ

崩れ築には人影もなく

ましら酒求めもとめて谷の村

七首の如光る乳房が

囚はれて地下室にゐる未成年

かすかに響く暗渠水音

山椒魚時には足を使はんと

痛風に効く月の滴り

パソコンの教室のあるチラシ切る

作務衣が似合ふ髭もほどほど

吹きすさぶ修羅は見せない社長業

牛の在処を野良に尋ねる

じゃんけんに紙ばかり出し飛花落花

雛が笑まふ縁の日溜り

中村ふみ

間村 佐紀子

日高 健

佛 健

佐 悟

み 玲

悟 玲

佐 玲

み 玲

玲 悟

み 悟

佐 悟

み 悟

み 玲

悟 玲

み 玲

み 玲

佐 玲

銀の匙捨てもならずナオに春の雨

P T A の金曜が来る

骨のためテニスラケット振り回し

すってんころりん転ぶ階段

男優が立候補する顛末は

親爺の工場灯しのころ

マスクしてハローワークに通ふ日々

猫の顔色見つつ底冷

黒塀の死角に招く君の指

岡本理研護謨と軍帽

故郷の甲斐駒連山照らす月

手づくりの籠秋ノウの七草

実柘榴はつましく食ぶべかりけり

トリトンの海波頭立つ

子は遊ぶ青きマントを翻し

太極拳はみんな輪の中

三神に仕掛けられたる花の夢

蛙のうたの満つる夕暮

悟 玲 み 佐 玲 悟 佐 み 悟 玲 み 佐 玲 悟 佐 み 悟 玲

ゴッホの鴉

佛 渕 健 悟 捌

晩稻刈るゴッホの鴉低空に

高圧線にかかる昼月

文化祭大臣おとどの形に化粧けい粧して

畳の縁を踏まぬ心得

隣家の幼子絵本持ち来たり

ころがってゐる蟬のぬけ殻

夏帽子ウの荷風散人飄々と

ミルクホールでデキシ―を聴く

カルカッタ何が聖やら俗ぢややら

娼婦の臍は黒光りして

初恋の俳離かれぬ冬の月

節季仕舞ひの帳面をつけ

フィットネス水中歩行一時間

河馬の欠伸に虫歯ちらほら

吊革を満員電車に守り切り

しごと仲間はみんな戦友

最果ての岬の花の降りしきる

嗽の水もあたたかくなり

近藤 守

佛 渕 健

生田 常

古 賀 一

日 高 英

青 木 秀

島 村 暁

悟 同 樹 義 巳 郎 義 二 男 二 巳 樹 悟 義 郎 二 樹 巳

ナオ

おぼろ夜に *シユーム チユーム 猫の髭

シルクウエア―淑やかに脱ぐ

妖劍の餌食も女の運命ひとさだめにて

鉢ばちばち詰める盆栽

生野菜胡麻だれソースたつぷりと

米寿の恩師喜寿の教へ子

放浪の詩人の墓に蝸牛

撞いてみようか山の半鐘

下校時の黄色い声のあふれゐる

あれは何処の娘大和撫子

月さやかアポロ帰還のその時も

ガラスの箱にすだく鈴虫

外ナウつ国の松茸に酌む紅き酒

ちらと見えたる無差別むしゃべつの境

いざ行かんメビウスの輪の裏表

何故かふらここいつまでも揺れ

手鏡ほいどに乞食棲みつく花灯り

駒に鞍置け春はたけなは

*je aime tu aimes : I love, you love

平成十四年十月二十八日 首尾
於 雑司ヶ谷 大倉

郎 悟 巳 郎 二 郎 男 同 義 男 義 樹 一 男 巳 義 巳 郎

正月や 膝送り

正月の雪見に集ふ雀かな

初荷を祝ふシャンパンの泡

古ピアノ即興のジャズ連弾きて

紐うねうねと編上げの靴

有明に杣人早も家を発つ

横抱きにする芋の大きさ

秋深き僧の懺悔を聞きながら

新車で飛ばすイル・ド・フランス

あひみてのちのつはりの嬉しさに

壬生浪なればと送る銭っこ

赤銅の月投げ上げる夏の海

馬面剥が妙に入れ食ひ

きやつ等には甘い言葉はかけまいと

背戸の小雨に研がれゐる刀

遺族みな受取人に驚きて

ブラックホールに新説を出し

花冷えの離れになぞる鳥瞰図

蜂の巣つつく子らの喚声

佛 日 日 林
 高 高
 健 英 鐵

悟 玲 二 悟 鐵 玲 二 悟 玲 二 鐵 悟 玲 男 二 玲 悟

ナオ

P T A いつ終るやら遠蛙

六価クロムの流れだすまま

足萎えて巡礼やつとあがる階

天人遊ぶ楽園の夢

角帽の影に憂ひを飼ひ慣らし

山椒魚の閉ざされし岩

赤星を追ひかけてゆくオートバイ

ぶっさらぼうに髪を断ち切る

水晶のお前が一人あればよい

色なき風にゆるるたふさぎ

つくづくと面つきは似る鬼胡桃

ナウ

羅生門にて従者の視る月

おいでやすプラトンはんも来てはるえ

エレキテルとは味なことほり

指と指触れたばかりに戦きて

神棲みたまふ臍のあたりに

傾くさ花満開の重みゆゑ

薦をかぶって鯛焼く春

二 悟 玲 二 同 鐵 悟 二 鐵 悟 同 玲 二 玲 悟 二

平成十五年一月三日 首尾
於 筑波荘

迦陵頻伽

本屋 良子 捌

光背の迦陵頻伽や風薫る

蓮ひとつ咲く池の小波

無伴奏チェロに心のためたひて

フズソナ入りの卓に招かれ

月蒼し太古の原の影は誰そ

葡萄酒醸し眠る大樽

森の径マッシュルームに目が止まり

しあはせ占ふ銀の砂

天満屋のお初にぞっこん惚れ込んで

涙で包む恋の短刀

重過ぎし傘の雫を払ふ庭

凍つる三日月跳ね橋の上

没葉を捧ぐる博士降誕祭

縫ひぐるみ抱き嬰の笑へる

空港にタップ踏んでる象二頭

母国の土は甘く切なく

言の葉に変はる花びら吾を埋む

少年の吹くたんぽぽの絮

本屋良子
船渡文子
瀬尾千草

文草良文草良草文良同草文草文良草

睨み鯛

八代

嫋 捌

睨み鯛にらみを効かせ二の替

繭玉いくつ数ふ児の声

里山の小径ジョギングコースにて

犬の尾と脚長ささまさま

夜は更けて切り絵のやうな窓の月

芋煮の会の知らせ待たるる

丹精の菊を飾りて入選す

眸と謎謎がたつぷり

埴輪めくをのこをみな語りひて

煙草のけむりつくる「の」の文字

ドア越しの波止場の酒場ジルバ鳴り

メリケンザックひよいと担いで

蜘蛛払ひ海外青年協力隊

棉蒔を終へ仰ぐ月代

豆本は武井武雄を秘蔵せり

誰かが来ては座る広縁

かがり火の消え魍魎の花見刻

捧げ持ちたる朝の櫻湯

八代 嫋

生田目 常義

中田 あかり

鈴木 了斎

村田 富美

八角 澄子

桑原 美津

斎 常

津 常

津 常

津 常

津 常

津 常

同 常

澄 常

り 常

津 常

常 常

蓮根掘

文音

吉藤とり子 捌

言交はず胸まで泥の蓮根掘

目だけ出したる赤い冬帽

久々に三味の音色を楽しみて

帰り来るなり顔洗ふ猫

月早しビルからビルへ歩道橋

風炉の名残の茶会催す

その昔源氏の君の紅葉狩り

面影の失せ醒めて儂し

文出してよりの幾日曆練る

読みはじめたる推理小説

たらちねの母と崇めて脛齧り

もう一本と頼む正宗

浴衣着てカランコロンと月の道

茄子や胡瓜の無人販売

湖に山逆さに写り浮き上がる

リュック下ろしてほっと一息

太極拳しなふ右手に花の舞

鶯の声真似る子供ら

吉藤とり子

吉村 ゑみこ

桑原 美津

山田 喜美枝

とこ

と枝

と津枝

と枝

と枝

と津枝

と枝

と津枝

と枝

と津枝

と枝

とこ

とこ

ナオ

半跏趺座白衣観音春の色

シェフの工夫で店は繁盛

キューピッド立てて待ちをるバースデー

君の笑窪にひと目惚れして

雪吊りの縄さらきらと日を返し

祖母の紙衣の匂ひ懐かし

笑はせてしんみりさせて借りる金

頭抱へてうづくまる橋

野の道を行く小学生スキップで

出発進行電車新型

海岸線地球の円さ望の月

新嘗祭の直会もすみ

鬼ナウやんまくるくるくると指まはし

急に黒雲雨降りこぞう

休憩にみな走り込む百貨店

街頭テレビイチローを見る

花筏寄せては離る川半ば

山科あたり野遊びの人

平成十四年三月一日 起首

平成十四年三月十四日 満尾

津とこ枝津とこ津枝と枝こ津こと枝こ津

源

心

己が影

梅田 利子 捌

小春日や背伸びしてゐる己が影

猫くぐり行く山茶花の垣

黒鍵のエチュードさらり弾き終へて

嬰の頭上に揺れるモビール

月の舟お伽の国へ船出する

龍田の姫に贈る手鏡

雁渡り思はぬ方の文届き

特攻服の一夜妻なる

散居村こんもり囲む屋敷林

じっくりねかす味噌の大甕

ノーベル賞戴くまでの主任さん

英語ジョークにオチが付いたり

勘定は隠居まかせの花見酒

歯ざはりのよき四月大根

梅田 利子

梅田 實

鈴木 美奈子

松島 アンズ

棚町 未悠

奈實

悠實

悠實

奈實

奈實

同

奈實

奈實

奈實

大仏も耳をすまして亀の鳴く

イラクへ向かふ査察一団

アンパンマン味方に付けば正義勝つ

懐手して無心する奴

いきあたりばったり八丁堀の午後

紅殻格子伊達の立て引き

マハに似た肩あらはなる飾り窓

薔薇の蕾を砕く褥ぞ

緋月に天道虫が飛んで行く

百里砂浜愛車走らす

^{ナウ}
いざメジャー夢と不安を握りしめ

殿様蛙喉を鳴らして

満願の夫唱婦随の花行脚

復活祭のシャポー赤白

平成十四年十一月二十七日 首尾

於 東京ウイメンズプラザ

實 利 悠 實 悠 ズ 同 奈 悠 ズ 奈 ズ 悠 實

ポケットの穴

金久保淑子 捌

木枯しや思はぬ穴がポケットに

金久保 淑子

なじみの店で買ひし鯛焼

鈴木 美奈子

波しづか鷗居並ぶ岬にて

篠原 達子

真似をしたるか児の大欠伸

中田 あかり

月浴びて塔を眺むる別所の湯

佐古 英子

林檎の熟るる香りただよひ

達 奈

爽やかにアダムの髪をかき上げて

達 奈

ちよい惚れ気惚れ底惚れは駄目

達 奈

あのことでなげえ草履をはきやした

り 達

笠懸地蔵にはづむ賽銭

英 り

ノーベル賞全国ネットの主任さん

奈 英

杯高々と「スコール」の声

英 奈

花筏風にかたちのふと崩れ

り 英

だんだら蝶の憩ふ草蔭

達 り

イースター牧師のカラー糊強^{ナオ}く

スポーツジムに黒のベンツで

よいとまけ母の背中を忘れまい

小鍋に分ける味噌の雑炊

3DKひっぱりこむには丁度よく

をんなは豊かな海に変身

胸臍に男泣かせて地獄まで

マウントクックセスナ横切る

キャンプの火月にとどけと歌ふ子等

逃げる蚯蚓を釣師追ひかけ

漢方^{ナウ}に凝って豊饒喜寿むかへ

銀座八丁着流しで行く

鬼瓦くすぐったげに花の下

潮吹きあぐる桶の蛤

平成十四年十二月十一日 首尾

於 池袋 滝沢

*スコール…乾杯の合言葉

り 淑 奈 達 り 達 り 同 奈 り 奈 達 奈 り

ところてん

倉本 路子 捌

明日のことあすにまかせてところてん

倉本 路子

首を傾げる羽抜け鶏

峯田 政志

ドラムソロポリュームしほり聞くならむ

篠原 達子

大学ノート記すマーカー

森 明子

^ウ十三夜離陸の時間せまりくる

村田 富美

菊酒注ぐ薩摩ぐい呑

三木 俊子

残り蚊を打った手のあと撫でてやり

古賀 一郎

ピリカメノコの長い睫毛よ

志 達

いまはまだ観光名所五稜郭

志 達

英国女王長き御在位

俊 志

二重連SLの火夫塩を舐め

郎 俊

夜明けは近い歌ひつつ行け

達 郎

ロックヒルダムの記念樹花盛り

美 達

烏貝てふ渾名持つ人

明 美

W杯^{ナオ}しきる苦勞の抜参り

指揮棒ひとつ世界の征爾

森の中地下の酒蔵酒満ちて

絞り浴衣に黒塗の下駄

まことは嘘嘘はまことのプチホテル

揺れ定まらぬ恋のスケール

かくなれば死んだふりするほかはなし

月の輪熊の月に吠えゐる

蝦芋と干鱈煮込みしお弁当

あっちむいてほい暇つぶす記者

ナウ
国連の兵に守られ学ぶ子ら

夢なら逢へるハリーポッター

よもすがら踊り明かして花の下

はだれ雪置く故郷の丘

平成十四年六月十五日 首尾
於 新宿赤城社会教育会館

明 志 美 俊 志 俊 郎 同 達 美 同 郎 俊 郎

昼 蛙

篠原 達子 捌

人間界のうはさ話か昼蛙

篠原 達子

水輪ひろがる種池の岸

坂本 孝子

春埃離陸の一機見送りて

八代 嫺

ウインドブレーカーぽいと脱ぎ捨つ

福田 貴志

山小屋に飯盒洗ふ窓の月

棚町 未悠

共闘時代暑かつたわね

孝 嫺

豹変の誰も知らない甘え癖

孝 嫺

風にのりくる恋の舟唄

孝 嫺

大道芸パントマイムの目が動き

志 同

王家の谷の見ゆる街筋

同 志

直線の多き素描は鉛筆で

嫺 悠

香を聞くのに坐りなほして

悠 嫺

餅花に少し猫背の狂言師

嫺 孝

ひとかけ絶えし宵の粉雪

孝 嫺

ナオ
湯殿神東北東が吉と出て

RV車の整備完了

後輩の育ちて今やライバルに

縁台将棋日の暮れるまで

待ち兼ねて曇り硝子の冷し酒

撫でてください盲腸の痕

有明の抱いてゐたのがしゃ鬮體

鳴くに鳴けないおかまこほろぎ

みちのくの旅なら燕帰る頃

トートバッグに詩集覗かせ

ナウ
速攻の力士いつしか最年長

健康法はよく寝よく食ひ

かくれんぼう良寛さまは花の蔭

口まんまるな埴輪うららか

平成十四年三月二十七日 首尾

於 東京ウイメンズプラザ

悠 嫻 志 同 孝 悠 嫻 孝 同 志 嫻 悠

白雲や

杉山 壽子 捌

白雲や展びゆく美濃に夏立ちぬ

杉山 壽子

早苗揺らせる嶺よりの風

中森 美保子

技術指導工夫重ねて閑もなし

伊藤 航

安楽椅子に読みかけの本

壽 保

キツチンの月に若者米を磨ぐ^ウ

航 保

単身赴任秋刀魚食べたか

航 保

はんなまの恋ばかりは身に入みる

壽 航

エロスの神の思し召すまま

保 航

高らかにフランチェスコの鐘の音

航 保

水の都を永住と決め

壽 航

亡命の一家安堵の笑顔あり

保 航

寢息といびきリズムゆるりと

航 保

花霞ただよふ迎り碑の在り処

同 保

春泥付けた子供自転車

同 保

雪しぐれ

鈴木千恵子 捌

雪しぐれモノクロの街動き出す

鈴木千恵子

睫をそつと拭ふ手袋

若林文伸

からくりの時計の針の重なりて

山寺たつみ

糶の眠る酒の発酵

トレーラー^ウ積み荷作業を覗く月

エヴァ呼ぶアダム声のさやけし

石榴割るすべてを君に捧げんと

未踏の沢の遊行連続

信玄の隠し湯の夜は旅疲れ

座敷童子が背で微笑む

洗濯機低く唸れる全自動

香具師の啖呵に人だかりする

篝火に夢見る花のイリュージョン

琉球列島御清明節

伸子み伸子み伸子み伸子み伸子み伸子

ナ
春炬燵うから集へば老いもゐて

眼鏡の奥の光る鑑定

六世紀円墳群の丘に立ち

捨てればこそと踊る空也忌

再生紙象牙の色のやはらかき

彼と頬張るランチ焼肉

月涼し人待つ閨に肌熱く

翅を濡らして蝉生るる宵

初飛行ハングライダー鳥となる

七つボタンに憧れた頃

チ
劳咳といふ語は今や死語と化し

南に広く採りし縁側

園丁の肩に花片どこからか

携帯電話切れば亀鳴く

平成十四年三月七日 起首

平成十四年四月四日 満尾

執筆

み 伸 子 み 伸 子 み 伸 子 み 伸 子 み 伸 子 み

風のホイッスル

鈴木美奈子 捌

桑の実を含むや風のホイッスル

鈴木美奈子

夏岳を見る丸き手眼鏡

五十嵐讓介

化学式黒板いっぱい書かれゐて

武井雅子

ノートの角に動画作成

山田喜美枝

監督のNG続く真夜の月

篠原達子

焼もろこしをそつとさし入れ

雅

そゝろ寒「僕に気づいて」が言へぬまま

讓

同窓会に若禿の人

雅

Uターン宮司の職を継ぐことに

達

トトロの傘に逢ひさうな森

同

舟早し四万十川の藍に揺れ

枝

和製英語で歌ふ民謡

雅

耳寄せて言葉交はすか花大樹

枝

溜塗椀で蛤つゆを吸ふ

讓

ナオ
朧夜の牛車の軋み夢の中

記者を待たせて迫る締切り

逆転と思ひしシュートはオフサイド

不惑となれば賽の分かれ目

巴里祭ひつつめ髪で朝帰り

お針子ミミの長い告解

錆びつきし錠前の穴暗くして

半過去大過去みんな忘れた

寒の月三代揃ひ酒を酌み

越冬燕巢づくりの軒

ナウ
内視鏡S字結腸難渋す

大阪弁のカーナビを買ひ

花の雲水面に影を落す濠

萌ゆる若芝じゃんけんの子ら

平成十四年六月九日 首尾

於 柏市光ヶ丘近隣センター

枝 雅 讓 雅 雅 達 奈 讓 雅 奈 達 讓 達 枝

星飛ぶや

副島久美子 捌

星飛ぶや光の筆を縦横に

副島久美子

初めて涼し月の草叢

百武冬乃

子等かじる林檎の香り漂ひて

峯田政志

貸自転車ウの鍵を確かめ

山口美恵

番号をつけて海亀放す浜

佐古英子

すててこ先生向ふパソコン

乃志

あの女のクリニカルパス覗き込み

志乃

頬紅刷いて若作りする

英同

狂言師檜の板を踏み鳴らし

同英

欠伸に混じる躰をちこち

恵乃

不祥事も度重なれば不感症

恵乃

神も仏も我が味方なり

恵志

花吹雪ひとり残らず花を負ひ

志乃

ハモニカ少年春惜しみつつ

乃志

蔵座敷阿蘭陀渡りの蝶の杯ナオ

先祖譲りの器用貧乏

特攻隊だった息子が胸に生き

青鬼灯の揺れる細道

囁きに大きなピアス邪魔になり

さうしてああしてとどのつまりは

開けみれば浮気を責める遺言状

樋口一葉新札になる

月円か雑貨屋にゐるかじけ猫

鰯揚げて酒の旨さよ

言ナウひ廻し訛隠せぬナレーター

ホームステイは囲碁指南つき

ぼたん雪咲き満つ花にひもすがら

眠る小雀羽ばたきの夢

平成十四年八月十四日 首尾

於 池袋 滝沢

英 久 英 志 乃 恵 英 志 乃 恵 志 乃 英 恵

香具師の声

柵町 未悠 捌

秋祭仕込みに忙し香具師の声

今年や豊年はづむお初穂

月の舟貿易風を帆に受けて

シナモン・ステイック熱き珈琲

プレゼントクリスマスマスローズコサージュに

寄りそへよとて梟の鳴く

落城の姫を守りて関所越ゆ

カットNG怒鳴る監督

サイン会待てど暮らせど人よらず

食品売場特売の頃

不景気は底なし沼にはまりこみ

杖を突いたら石油噴出す

花の下花のクイーンの片ゑくぼ

姐御と呼ばせる男あたたか

柵町 未悠

篠原 達子

島村 暁巳

高橋 豊美

佐藤 良彌

古賀 一郎

豊

一

巳

同

彌

巳

達

一

ナオ
読みさしの寂聴源氏おぼろの夜

万年筆に亀甲の紋

クルーズのディナーの視線一身に

還曆祝ひシャンペンを抜く

ひょうさんな狸に出会ふ帰り道

懐手して天狗降り来る

なれそめは柳田国男のゼミでした

駈落の果波照間の島

活き鮑塩を利かせて喰らふ月

雄の三毛猫片陰にゐる

ナウ
貧極め一葉五千円札に

井戸清らかに守る町内

花の午後フレンチホルンいづくより

弥生の山に行きすぎる雲

平成十四年九月二十一日 首尾

於 新宿赤城社会教育会館

達 一 已 達 同 彌 一 已 彌 一 已 達 悠 豊

三伏や

長崎 和代 捌

三伏や古地図にもある笹筒町

長崎 和代

瀬戸の火鉢に泳ぐ出目金

染谷 佳之子

片時も口を離さぬパイプにて

今宮 水壺

脚立で筆を揮ふ大作

竹田 登代子

招かれて月の宴の正客に

倉本 路子

名残りの茄子嫁の流し目

壺

鶉色の揃ひの蹴だし阿呆連

路

カーナビまかせ渋滞の道

之

ベツカムヘアー雨に打たれてくしゃくしゃに

登

勝利の女神地球支へる

路

産廃の山から拾ふ稀覯本

登

歴代首相こんな悪行

壺

男ばかり津軽訛の花見莫産

之

元はもぐらの鴛うづらひよっこり

路

春泥をせこせこ急ぐ教誨師ナオ

いつかう穴の合はぬポシエツト

消ゴムに彫られて女優ゆがむなり

梅酒にぼつとあからめし頬

さりげなく組みし素足の眩しくて

黄泉比良坂鬼女となりても

生涯を金鉞掘りに賭けしとぞ

べろべろばあに泣き出した孫

お月さま細くなりゆき毛糸編む

布哇帰りのひきし大風邪

督促ナウの書状再々達筆で

羽があるなら山のあなたへ

花浴びて来し方諾ひゐたりけり

親猫子猫欠伸する昼

山本千代子

壺|登

路

同

千

登

壺|

千

路

壺|

千

代

執筆

平成十四年七月二日 首尾
於 新宿消費生活センター

蒼き鏡

百武 冬乃 捌

蒼き鏡抱きて行かな冬衢

木枯し凌ぐかろき口笛

父と子とインドアプレイン試すらむ

かたづけられしロッキングチェア

三日の月輝く星を供とする

はじめての接吻^{キス}朝露のごと

諸霊祭聖書にはさむラヴレター

引越荷物フェラーリに積み

番犬と野良猫仲よく暮す家

塩ひと掴みお隣に借り

海峡に散骨供養船の旅

ティースペースト出たら戻らぬ

笑み溢れ手話のグループレアの下

まあるく描く初虹の橋

百武 冬乃

青木 泉子

篠原 達子

中田 あかり

山崎 一恵

達 恵

同 泉

同 泉

り 泉

泉 達

同 泉

同 泉

同 泉

同 泉

宗因忌吟醸の酔漸ナオくに

潺々としてフーガ流るる

DNA遠き事実を探り出し

美容整形まだ不満足

煮凝りの中に愛あり憎しみも

兄と妹漆黒の閨

歴史小説見て来たやうに書いてある

腰痛体操効きしこの頃

網シャツに月の出を待つ峠道

右へ左へ翔べる蝙蝠

喜寿祝携帯電話持たされしナウ

ずいと背筋を伸ばすお点前

ワシントン河辺の花の咲き誇り

ホットドッグを分けるのどけさ

平成十四年十一月十三日 首尾

於 池袋 滝沢

泉 乃 惠 達 泉 り 達 惠 泉 り 達 惠 泉 り

水煙草

吉村 忍みこ 捌

片蔭や漢燻らす水煙草

吉村 忍みこ

夏菜積まれて声高の市

島村 暁巳

パソコンの図形制作進むらん

百武 冬乃

展示替へする文豪の文

村田 富美

乳を呑む嬰兒小太り望の月

伊勢本 如代

秋の遍路に泊まりあはせて

同

傷付いて香るまるめろ・イヴ・わたし

君を待つてる方舟の底

乃 巳

NPO地雷の原に木を植ゑる

乃 巳

外科医の額拭ふ看護婦

巳 乃

最終のラッピングバス雨の中

如 乃

マリリンモンローちよつとにじんで

富 乃

ひとさしは花の夕にかざす袖

乃 如

兄と弟雲雀野を行く

如 乃

ナオ
うらかに放るサンダル裏返し

長期予報で仕込む商品

紺似合ふ毒消し売りに道聞かれ

浜の屋台であふる塩烏賊

酒といふ友あり李白の詩もあり

醒めればそこに濡れた唇

ささやきの間に姫様を押し隠し

からくり人形みんな知ってる

御手洗に氷くだけば月走る

故郷の父母励む雪搔

ナウ
がらがらのブルートレイントンネルに

名物弁当どれにしようか

大喝采象が笛吹く花の山

春の炬燵にエース四枚

平成十四年七月二十四日 首尾

於 東京ウイメンズプラザ

富 巳 同 富 乃 巳 乃 富 同 巳 富 如 糸 如 巳 乃 同 富 乃 巳 乃 富 同 巳 富

久闊を

若林 文伸 捌

久闊を叙すや藤散る池の端

山寺辰巳

春雨傘の歩む玉砂利

若林文伸

猫の仔の眠りも深き工房に

佛淵健悟

祝ひのワインラベル特製

鈴木千恵子

せち辛き世とは言へども芋名月^ウ

日高玲

人の噂の七十五露

鈴木了斎

谷紅葉行き交ふ袖も縁のうち

式田恭子

茶店の旗が軒にひらひら

巳

ニトロ舐め片息治る父の背^{せな}

伸

桂馬は又も脇道に逸れ

悟

初めてのおつかひ皆が見守りぬ

千

夏の館に仮面失ふ

玲

陸奥にストーンサークル包む余花

斎

遠くの鐘は昼を知らせて

恭

爺婆でなんとかこなす山の畑ナオ

雀の宿に行きたいと言ふ

閻魔王憤怒の相で舌を抜く

ハードロックの弾く酷寒

かのひとの肌に吸ひ付く革衣

優しい顔は他にしないで

港々津々浦々に事情あり

ちちろの声の消ゆる釣船

すさまじの剣といふべし月を切る

新胡桃割り払ふ雑念

F1はモンテカルロを大爆走ナウ

ライバル先に逝ってしまった

花吹雪埋もれてもなほ降り続け

朝寝の床に通ふそよかぜ

平成十四年五月二日 起首

平成十四年六月六日 満尾

斎 恭 玲 伸 千 悟 巳 斎 恭 玲 伸 千 悟 巳

ㄩ
二十韻
ㄩ

翁の日

浅賀 丁那 捌

虹色の風立ちにけり翁の日

浅賀 丁那

眼の中も枯るる蟻螂

下鉢 清子

ライヴある波止場の煉瓦倉庫にて

伊勢本 如代

土を選んで水を運んで

根津 忠史

蘊蓄もすこし加へる衣被^ウ

橘 朱鷺子

月に足出す茂林寺の釜

小池 啓子

お仲人囲炉裏恋しき頃を訪ひ

清

あたし天秤座のうまれなの

那

環境にやさしいひとの一輪車

啓

千本ノック伝説となる

史

ナオ

伽羅琴の楽に送られ帰郷せり

何を呑んだか鮫鱧の腹

聖典にすべて許すと記されて

熱砂の丘を降る姫君

夏怒濤をのこは月の影碎き

茅台乾せばマオタイ気障な科白も

ナウ

とりどりの葉に頼るほどの老

燕注意の駅の貼紙

釣人のうつらうつらと花の中

植音耳にかろきおそ春

平成十四年十月十六日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

如 朱 清 史 朱 那 清 如 同 啓

藤浪や

木村 真呂 捌

藤浪や菅公と酌む釣詩鉤*

木村 真呂

のどかに眠る庭の撫牛

原田 千町

楽堂に春の調べを奏づらむ

軍司 路子

ちよつと気取つて縞のボータイ

日高 英二

山の端に明けやすき月かたぶきて^ウ

花巻 珠枝

汗にはりつく髪の嫋々

千

仮面舞踏会妻とは知らず誘ひ込み^{マスカレード}

同

遺言状をまたも書き換へ

二

一枚のサッカー籤が大当たり

珠

アフガンの兎へ献金の箱

路

ナオ
辿り来し地雷埋もる野の末に

廃寺なれども撞けば鳴る鐘

もしかしてあれは母かも雪女

からめた足でふと目覚めたり

連子窓透かして月の覗く閨

唧々すだくまぎれ蟋蟀

ナウ
うそ寒の画家愛用のベレー帽

今に懐かし放浪の日々

花時の隠国こもりくの里賑はひて

いつしか現れしあはき初虹

* 詩鈎…酒の異称。典故は蘇軾「洞庭春色詩」

千 路 千 珠 二 路 二 千 路 二 珠 二 路 千 珠 二 路 千

平成十四年（菅公御神忌壹千百年）四月二十五日 首尾
於 亀戸天神社

心地よき

文音

くのあや捌

隣人の涼し風きて心地よき

くのあや

うすものの香も嗜のうち

杉山壽子

駅前の英語教室流行るらん

宮川 侑子

ベビー言葉を本にまとめる

や

月を詠む調べととのふ五七五^ウ

壽

囀適任彼のはにかみ

侑

新走りその気にさせてついと寄り

武村 利子

恋の病に罹るドクター

壽

遊園地ジェットコースター逆さまに

侑

渡る世間は鬼と仏と

や

ナホ

骨董の宝の山よ冬、満月

籤大当り顔見世の券

隈取りをほかす墨絵のやうな笑み

深層水のボトルがぶ呑み

マニキュアの指立てヒッチハイクして

神父様から婚の祝福

ナウ

糠味噌は日々忘れずに掻き回す

虻の羽音のひとしきりする

街上げてラジオ体操操花の中

ビーズ細工をかざる春昼

平成十四年八月二十二日 起首

平成十四年十二月十一日 首尾

利 壽 仇 利 仇 や 仇 利 仇 壽 利

春の闇

島村 暁巳 捌

西行も蕪村もそこに春の闇

島村 暁巳

白木蓮の香り馥郁

豊田 好敏

雛納めブラスバンドの練習に

棚町 未悠

いがぐり頭エース俊足

西田 一枝

月照らす猫柔らかく塀の上^ウ

秋山 志世子

馬市廻る彼と並んで

世

芸術祭舞台でまじにキスされて

敏

入ってみれば混浴の風呂

悠

江戸詰の家老は今の大使なる

敏

八つ目鰻でなほす湿疹

敏

ナオ
碧眼の孫と着ぶくれ寺詣り

質屋駄菓子屋消えるこの街

イエローキヤプターバン野郎夏の月

ブラウススカート空蟬のごと

裏切った彼に盛りたるねこいらす

一人酒酌む伊賀の片口

オウ
上場のご祝儀相場上々に

世襲貴族の裔が秘書役

古城なるガーデンパーティー花に酔ひ

遊動円木軟東風の中

平成十四年三月二十三日 首尾
於 角筈地域センター

世 悠 敏 敏 世 枝 敏 枝 悠 世

にぎやかな町

高橋 豊美 捌

にぎやかな町の方へと藤の風

高橋 豊美

春の日傘の渡る丹の橋

副島 久美子

到来の浅蜷のびのび汐吹きて

秋山 志世子

珈琲注ぐ手びねりの碗

山口 良子

月^ッ冴ゆるストラディバリウスきしむ音

西田 一枝

クリスマスには父帰るてふ

豊

はてさてと隠し子同士恋に落ち

久

くせも好みものめりこむ質

良

文楽の席を離して二枚買ふ

世

売り家の幟角ごとに立つ

久

ナオ
昼寝覚夢のつづきはこのあとと

アバンチュールは水上スキーで

マイタイにマルガリータで酔はされて

やや寒の脚強くしめつけ

印材の瑪瑙の肌を照らす月

厨の窓に揺れる干し柿

ナウ
アラスカに「荒野の呼び声」聞きに行く

オーロラの下記念撮影

花衣纏ひて舞ふは誰ならん

婆と婆との会話長閑に

久 良 久 豊 良 世 良 久 枝 良 枝 久

平成十四年四月二十五日 首尾
於 亀戸天神社

白玉楼

橘 朱鷺子 捌

朴咲くや白玉楼に酌みたまふ

橘 朱鷺子

夏蝶よぎるたまゆらの影

橘 野 代々子

ヴァイオリントレモロ高く響くらん

から拭きをする脚長き椅子

すつきりと新調の服初月夜

二科展めざす彼のモデルに

くちづけは青き蜜柑の香を持ってり

男川女川の水輪やさしき

もののふを捨てて東へ下る道

自然素材の箒捜さむ

ナホ

ワンゴールネットを揺らす左足

代々子

天空に風御戻りの刻

朱鷺子

奥まりし茶房の卓を予約して

鸚哥と暮す美人キャスター

気位の高き項に魅了され

低金利下のやり繰りの妙

ナウ

煎じ薬匂ひに浮び出るもの

並ぶ雛の夢見顔なる

月躲し花のトンネルバスツアー

遠蛙聞き開くメモ帳

平成十四年五月十六日 起首

平成十四年七月三日 満尾

江の海

橋野代々子 捌

江の海に夏色きらり走りけり

橋野代々子

清和の風の吹き渡る頃

橋 朱鷺子

袋棚重なる軸を整へて

買ったばかりのノートパソコン

宵^ウの月聞き取り確とドキュメント

いつしか紅を増す酔芙蓉

見詰められなほ深くする踊笠

仮の名で逢ふ女の愛ほし

ついと立ち特許許可局と云ってみる

シェフオリジナル・オムレツの味

捨猫ネコの公園占拠止めどなく

朱鷺子

眠りもならず又もくっさめ

代々子

ぼっぺんを吹けば家鳴りも覗く月

コベルニクスに憧れる彼

ナイスボデイ保つ苦勞は誰のため

温度計指す定点は零

オウ

独り居の終の友なり鸚鵡飼ふ

嬰に命名鎮守うららか

オフタイム花人となり杯合はず

引込み線に土匂ふ貨車

平成十四年六月五日 首尾
於 鎌倉おんめ様

初時雨

深川や蕎麦屋を出れば初時雨

東明雅

山茶花こぼる公園の垣

梅田實

絵手紙が航空便で届きゐて

松原弘子

猿とたはむる島の温泉

雅

月を待つ標柱さびて番所跡^ウ

實

抱き寄せられ匂ふ白桃

弘

風の盆男踊りのスマートさ

雅

太極拳の弟子がぞろぞろ

實

占ひで吉方とある籤売場

弘

オンボロ車靴で蹴とばし

雅

松原 弘子 捌

ジハードは物見遊山を巻き込んで

砂漠を冷す蒼き月光

伝染病撲滅の業まだならず

笑顔湛へて糟糠の妻

面目なやバスト九十に沈みたり

米寿になれば過去はみな夢

大観の富士と語らふ独り酒

シェフのおすすめ旬の白魚

花誘ふラルゴの調べ流れゐて

暮るるともなく暮れてゆく春

實

弘

雅

實

弘

雅

弘

雅

實

執筆

平成十四年十一月十三日 起首
平成十四年十二月十一日 満尾

師走空

峯田 政志 捌

雲低く何を急かすや師走空

峯田 政志

町内頭注連飾る頃

横山 わこ

新作のゲームソフトを予約して

日高 玲

うたた寝に聴く「猫踏んぢやった」

高橋 豊美

湖底に沈む村の家並月照らす^ワ

須賀 敬子

記者に奨める枝豆の皿

志

今年酒名はつけられて「恋の夢」

こ

名残つきせぬ閨のぬくもり

梅田 實

バブル期の建築ラッシュ泡と消え

敬

スケッチブックに残る神杉

玲

夏ナツの日の腕白ナカどもの秘密基地

有明月に草矢放ちぬ

食客になれば棘ある嫁の顔

妬ネタいて妬ネタかるるわけありの仲

二丁目のママと呼ばはれ還曆ナカに

涎垂ナカらして犬のお預け

ナカ

曲ナカがり角地藏前掛け取り替へて

通勤バスは春塵ナカの中

入相の鐘に誘はれ花の山

匂ナカひたをやか舞ふは佐保姫

平成十四年十二月二十一日 首尾
於 新宿赤城社会教育会館

こ 實 玲 實 敬 豊 こ 同 玲 豊

長旅の象

横山 わこ 捌

長旅の象の仔に散る紅葉かな

須賀 敬子

银杏拾ふ鋪石の上

百武 冬乃

月の部屋パイプの煙くゆらせて

高橋 豊美

廊下に一つおもちゃころがる

関口 靖子

二上りの稽古三味線音外し

古賀 一郎

君の好みの藍の縞柄

横山 わこ

ピルケースたしかめ入るプチホテル

乃

ガウディばりの過剰装飾

豊

落雷の続き全市の停電す

郎

蚊取り線香手さぐりでつけ

敬

夢の夢^{ナオ}經濟成長お題目

ただ寄せ返す浜の白波

恋と愛智恵を尽して逢ひし仇

真珠夫人のドラマなぞりて

永劫の業の澱みて霜の月

ふいご祭の爺のへべれけ

E^{ナウ}メール絵文字色つきおもしろく

春の野山に遊び暮しつ

花盛り千鳥ヶ淵の大使館

ジョギング後の風呂ののどけし

平成十四年十月十九日 首尾
於 新宿赤城社会教育会館

乃 靖 豊 乃 郎 乃 靖 豊
乃 わ 靖 敬 乃 郎 乃 靖 豊

∩
半
歌
仙
∩

脇起 木魂に明る

稻垣 渥子 捌

手をうてば木魂に明る夏の月

芭蕉翁

あやめを活けて客を待つ家

伊藤良重

再会を誓ふピットの青芝に

同

繰り返されるピアノエチュード

由川慶子

コーヒーをミルで挽いてる午後三時

小野芳梅

底冷えのする川近き町

黒木美代子

隼ウの眼に嘘を見透かされ

慶

愛告げる声やけに早口

梅

この恋はもう終りねと走り書き

同

北欧風のシンプルな椅子

慶

月仰ぐ絵のない絵本の初版本

葡萄酒醸す地下の酒蔵

稲垣渥子

海猫帰る父の遺品の煙草入

慶

お国なまりの話弾んで

梅

若者がバイク連ねる環状線

美

入隊式は黒い髪の毛

良

花吹雪見上げる空は無限大

美

蝶ひらひらと五百羅漢に

渥

平成十四年六月十八日 首尾
於 桜花学園大学

脇起 夏の月

加藤 治子 捌

夏の月御油より出て赤坂や

芭蕉翁

待宵草のほのかなる彩

加藤治子

足跡の一つ残れる白浜に

竹内 たつ子

筆持ちしままキャンパスの前

佐久間 然

大学の生涯講座賑はへり

稲垣 渥子

秋の燕が玄関の軒

同

戯れに小面をつけ月の客

然

恋の稲妻ぴかと走りて

渥

あいらしい背中に誰の爪の跡

間瀬 芙美

好みの色につくるカクテル

由川 慶子

脱ダムの知事失職を宣言し

アーミーナイフ懐に持ち

しんしんと峠の道に雪女

飛び立つ形なりで凍てし蝶々

求め来しデジタルカメラ子に習ひ

紙雛かざり和む病室

客待ちの車にかかる花の雨

遍路満願叶ふ吉日

美 慶 渥 慶 治 慶 た 渥

平成十四年七月十六日 首尾
於 桜花学園大学

水琴の

金山征以子 捌

水琴の音聴く秋の童心居

蒼空高く帰るつばくろ

あはあはと白き満月山の端に

ビーズで作る人形の服

七転八起の果てのケーキ屋さん

並木通りも結葉の頃

金山 征以子

下鉢 清子

吉村 ゑみこ

石井 淳子

来海 清

青沼 幸男

肌^ウあらは祭太鼓のあばれ打ち

茶髪搔きあげピアスぴかりと

遂げられぬ想ひをたたむコンパクト

倫敦塔に過ぎし青春

山口 佐喜子

吉田 梨江

清

鉢

跳ね橋の下ゆったりと船の行く

同窓会の地酒熱燗

凍月の宿にカンバス担ぎ入れ

犬の曳き綱。ピエールカルダン

浄瑠璃寺吉祥天の案内僧

見開く本に踏青の夢

花の宴乗込み鯛の届きたる

無口もつられ軟東風の中

ゑ

梨

男

ゑ

淳

佐

鉢

清

平成十四年十月三日 首尾

於 練馬区高野台地域集会所

草 苺

黒木美代子 捌

草苺兄と駆け足競う道

小野芳梅

あめんぼの浮く公園の池

黒木美代子

資料館所縁の人が訪れて

伊藤良重

ふと目に止まる新聞の記事

梅

月照らすキャッツ公演長き列

重

紅茶飲みつつ茹でる枝豆

梅

小鳥狩内緒で張った手ぐす糸^ウ

由川慶子

メールで知った彼にアタック

梅

はじめての長い口づけ船の上

美

戻す術なく進む秒針

重

魂の遠ざかりゆく気配して

硝子戸越しに冬の蝶舞う

咳してもたった一人の月の夜

ベーカー街のドアノブは銅

相方の呆けにつっこみ絶妙で

たらいの底を動くやどかり

花アーチ手をつなぎゆく子供達

風暖かくおだやかな午後

重 慶 梅 重 慶 美 重 慶

平成十四年四月十六日 首尾
於 桜花園大学

月影の尾

潮入りに月影の尾のゆらぎけり

秋海棠の垂るる水際

溢蚊を画集の隅に追ひやりて

眺め気に入る新しき部屋

センサーが水平飛行の音とらへ

プロジェクトチーム汗の男等

二つ切り大皿に盛る甜瓜まくわ

双児の姉を捜す弟

アリランの峠越えゆく恋を捨て

重ぬるごとに強くなる酒

小池 啓子 捌

小池 啓子

内田 麻子

斎藤 久美子

杉崎 雅子

久 啓

久 啓

高瀬 美保

麻

雅

久

電気機器つきつき調子狂ひだす

困ったときの百円シヨップ

狐火を見たときふ古老月の縁

鯰起し来て漁師勇めり

ハンドルは安全運転どこまでも

遍路こぞりてうどんすすれる

飛花落花読みびと知らずの歌詠ず

やっとしづもる巢籠りの鳥

同 雅 麻 保 同 雅 啓 久

平成十四年九月二十一日 起首

平成十四年十月十九日 満尾

於 梶が谷房連庵

菊の酒

友情に空白のなし菊の酒

傾く月にまだ果てぬ宴

蟪蛄の斧ふり上げる敵なくて

四輪駆動びたり横付け

画題きめ巨匠の描く二百号

紫キヤベツのとれ立てを置く

日脚のふ黒猫膝に甘え寄り

少女の声の透き通る頃

モンゴル風掠奪婚に憧れる

ケータイ覗き父の心配

五味 蓉子 捌

五味 蓉子

上月 淳子

内田 麻子

橘 朱鷺子

朱 麻

麻 朱

淳 朱

朱 同

同 淳

淳 同

禁断の木の実は今はためらはず

巖かに鳴る聖堂の鐘

外出にポアゾンひと噴き月涼し

帽子製作夜間工房

湯河原の麻雀仲間傘寿会

食後に甘き八朔をむく

花の輪に世界をつなく夢捨てず

ビルの彼方にかかる初虹

麻 蓉 淳 麻 淳 麻 朱 麻

平成十四年十月二十四日 首尾
於 梶が谷房連庵

芥吹かるる

鈴木了齋 捌

川上へ芥吹かるる暑さかな

鈴木了齋

未央柳びようの咲き満つる垣

秋山志世子

絵手紙の転居通知を描くならん

式田恭子

新しき店小さき冒険

齋

月を待つ幼きどちの集まり来

志

梨の一つをくるむおもたせ

恭

をどる手ウの間あひをかすめる秋茜

齋

旅靴開けパソコンと辞書

志

イギリスとアイルランドの違ひ問ふ

恭

不思議な色をまとふ妖精

齋

海遠くかすかに泛ぶ滯標

横笛習ふ若き山僧

黒髪の倂つつむ雪積みて

心臓ふたつ射抜く寒月

トウシユーズ楽屋の隅に置き忘れ

勳語いさごしる老将の酔ひ

薄墨の花千歳せんざいの艶散えんらし

春の障子に映る鳥影

恭 志 斎 恭 志 恭 斎 志 恭

平成十四年六月十一日 首尾
於 新宿「藩」

梅雨寒や

高瀬 美保 捌

梅雨寒や大粒小粒豆の莢

高瀬 美保

ビールジョッキに残る泡の輪

岡山 朱藍

様変わり何時もの店のもう無くて

内田 麻子

道化の男玉乗りをする

杉崎 雅子

群青の海輝きて弦の月

橋本 桂花

きちさち蟻蛸追へど届かず

小池 啓子

秋深しリゾートマンションふつと買ふ^ウ

雅

金の算段遊ぶ算段

麻

やせ薬飲むより夫と半分こ

花

駆け落ちふやす村のカラオケ

啓

天も地も混沌として県知事選

凍月仰ぐ為朝神社

ふくろうはゴロクトホーセン鳴くと祖父

子よりの便りサグラダの街

騙絵のなかに浮かべる顔ありて

分散和音灯影おほろに

五目ずし小皿に分くる花の下

テニスコートに仔猫入りくる

斎藤久美子

花雅麻

麻保美啓

平成十四年六月十五日 起首

平成十四年八月十七日 満尾

於 梶が谷房連庵

猫のつそりと

武村 利子 捌

日盛りや猫のつそりと路地の奥

武村 利子

「かき氷有[□]」ゆれる軒先

杉山 壽子

マイカーにETCをつけるらん

高橋 良風

ドアツウドアで帰る四時間

古賀 幹子

月さやか下駄の音きき客むかへ

山田 歌子

秋草選び籠に投げ入れ

長谷川 芳子

棚^ウ経の益僧いつか代替り

風

幼な尻くるり早い逃げ足

幹

網潜りインターネットで恋探る

壽

砂中のダイヤいまのバージョン

歌

猪食つて消化不良の腹を撫で

憎き碁敵ぐつと親友

森涼し月の雫はミルクィで

大きくなあれ小槌一振

叩いても右に左に受け流し

年金暮しあたたかくあり

若者よ立て杯干さん花の下

浜に紅貝さがす人々

芳 風 壽 同 幹 風 芳 幹

平成十四年七月二十四日 首尾
於 名鉄ニューグランド 鳳凰

樟若葉

谷本 守枝 捌

樟若葉乙女の声は硝子片

矢崎 藍

大股に行くキャンパスの初夏

谷本 守枝

タンカーの舳先に鳥の止りゐて

竹内 たつ子

くるみの餅に抹茶一服

加藤 治子

頬杖をつきて弓張月の窓

た

電話鳴ってるレジのやや寒

藍

駄目^ウもとと云ひつつ見合すすめられ

枝

眉を作った男ばかり

治

恋の傷舐めて牡豹は蹲る

藍

コントラパスの通奏低音

同

パソコンで連句仲間を呼び集め

返信画面に星条旗あり

寒靄の流れて月の紐育

枯野はるかに神のため息

うたた寝の姿も小さし老いし母

紋白蝶は網の目を抜け

花びらの肩に舞ひくるねねの道

地酒酌み合ふ公園の春

枝 た 治 藍 枝 た 枝 治

平成十四年四月十六日 首尾
於 桜花学園大学

脇起 夾竹桃

長坂 節子 捌

夏の月御油より出でて赤坂や

芭蕉 翁

茂みに映る夾竹桃のいろ

鄭民欽

公害に耐えて烏の飛ぶならん

水口康彦

塾通いする子らの弁当

小野芳梅

風花に紅くなつてゐる両の頬

石原未那

ホットコーヒー湯気のゆらゆら

近藤優希

^ウマンモスに抱かれて眠る夢をみた

長坂節子

心惑わす恋の囁き

希

映画館とても気になる君の胸

飯田麻衣子

住基ネットにつのるイライラ

麻

ひたすらに播鉢でする山の芋

濁酒手につかる岩風呂

松花江の水面に揺れる望の月

写真撮り撮り旅人の行く

大リーグイチロー狙う打率王

子犬を連れて散歩する日々

前を見て真直ぐくぐる花の門

矢作大橋上る若鮎

朴

織

女 那 麻 希 梅 女 彦 梅

平成十四年八月六日 首尾
於 赤坂 大橋屋

地虫みち

枳杉の巨木伝ひや地虫みち

芽ばり柳の揺るる堀端

見本市春のスカート手にとりて

外国人と名刺交換

月笑へ狂言講座蓋を開け

ぶらり降り立つ新涼の駅

丹念にアガリクス茸埃拭き

ハンサム猿の毛繕ひまた

うぶな恋無骨過ぎます若頭

いつも突然仲直りなぞ

中林 あや 捌

中林 あや

山口 美恵

吉井 景子

や

恵

景

恵

景

恵

や

棚の奥美術全集徴だらけ

飼へば鬪魚も長命の相

バンコクの旅あわただし商社マン

ボトルの酒と大根と月

一輪車貸してやらない子供にも

つじつま合はぬ夢をよく見る

補陀落へ続く海あり花の昼

片側町を包む陽炎

景

恵

や

景

恵

や

景

執筆

平成十四年三月十二日 首尾
於 串本浦島ハーバーイン

秋の蝶

中村 ふみ 捌

図書館に迷ひ込みたる秋の蝶

中村 ふみ

つばらつばらと黄落に月

松本 碧

名物の栗きんとんに誘はれて

蒲原 志げ子

ぱつと写して送る写メール

川名 将義

自転車の前と後ろと背にこども

紺野 千寿子

雷雲が街をおほへる

松原 弘子

金魚^ウ売り一服いつも井戸のそば

げ

主語省略で解り合ふ仲

同

カレンダーハート印でうめつくす

寿

やけに反りたる歌麿の指

義

覚悟する歯科医の匂ひ椅子の上

ヘッドフォンにてムード音楽

寒月に二十四年を想ひ越し

厠の凍つる僧房の庭

家中をバリアフリーに模様替へ

パパのラケット猫のおもちやに

呑むほどに色づき花の大江山

鐘はおぼろに夢は正夢

碧

弘

同

碧

義

寿

義

執筆

平成十四年十月十九日 首尾

於 横浜県民サポーターセンター

初旦

中森美保子 捌

新聞の届きし気配初旦

中森美保子

ビッグニュースは皇女の粥箸

杉山壽子

ぼちぼちと田螺水田に戻るらん

高浜光江

葺替の長腕組みをする

武村利子

ミルクィの月のおぼろを触れたくて

壽保

晴れの装ひ写す姿見

壽保

阿修羅像眉根凜凜しく立ちたまふ

利光

交通整理犬も従ひ

光保

抱きしめてシャワーのやうに好き百遍

保壽

溶けた心が枕いちぢめる

壽保

大いなるものの蠢く夏樹海

声の弾ける放課後の児ら

感性のアンテナを研ぐ月今宵

志茂田景樹に案山子目を剥く

どぶろくの土瓶名札のぺんだんと

図書館の棚いいなレトロも

息をのむ花の白さよ気高さよ

春鳥つどひ寿ぎの歌

光

保

利

壽

光

利

光

執筆

平成十四年一月二十三日 首尾

於 熱田神宮龍影閣

ほがらな面

生田目常義 捌

連衆のほがらな面や初懐紙

池田 やすこ

福茶を配るしなやかな指

吉田 酔山

隣家のチエ口の調べはつかへるて

松本 碧

洋服を着て散歩する犬

中村 ふみ

月天心五分停車の無人駅

山本 要子

木の実降りつぐ山里に寝る

村山 加津枝

秋のセル父の着丈は裾短か^ウ

生田目 常義

鼯^ヌ眞は誰を新三^{*}之助

枝

亡き妻に隠せし秘事もあらはれぬ

山

お互ひ様と天よりの声

こ

お揃ひの冬帽椅子に寄り添へる

沖繩が好き真青な海

ビール冷えテラスで月と乾杯す

ハエトリグモはすべり走りて

百度石元祿の号彫られぬし

快気祝に届く饅頭

再見ツアイチエ!と李君の声花の朝

野は果てもなく続く陽炎

*新三之助・当時新進歌舞伎俳優、尾上辰之助・尾上菊之助・市川新之助

子 義 同 碧 子 枝 同 み

平成十四年一月十三日 首尾
於 大倉山記念館

武相莊

難波さえこ 捌

紅梅の艶の添ひたる武相莊

難波 さえこ

初蛙座す蹲の陰

倉本 路子

春コートエスニック風流行らせて

高橋 豊美

ロゴ入りライター煙草細巻

関口 靖子

差す潮に十六夜月の遊ぶらん

森 明子

一口茄子のよき漬かり頃

佐藤 良彌

重陽^ウの酒澄みきって新なり

美

よく笑ふ娘の声の明るき

靖

襟足の黒子へそつと口づけて

路

写真雑誌のスクープとなる

美

ボガードの「ベニスに死す」のバナマ帽

山紫水明無病息災

豎琴を弾く指白く寒の月

暖炉の薪をちろちろと燃す

バスを待つ六ヶ所村は北の果

野仏いつも微笑んでゐる

降りしきる花びらを背に親子鹿

夢幻と囀りを聞く

同 彌 靖 明 路 靖 こ 彌

平成十四年二月十六日 首尾
於 新宿赤城社会教育会館

年の垢

登坂かりん 捌

清兵衛*たそがれも身の丈ほどの年の垢

登坂 かりん

継ぎはぎかがり整へる足袋

山口 美恵

研修のサーベイ船に乗り込みて

峯田 政志

欠伸こらへる牡の三毛猫

山崎 一恵

寝待月子等の漫画に読み耽る

一

朱塗りの箸ですする新蕎麦

志

おととつと酔ひかけながらウ櫓田へ

美

右折するのか左折するのか

一

ゼネコンの空中権で建てるビル

同

「決められたリズム」唱ふ地の神

ん

姫宮は世界を巡り縁さがす

夏の日の恋月としつぱり

中庭のロストボールを蛇が巻き

無愛想なりレスキューロボット

賑やかに翁・媪の英会話

忘れ雪へと投げる吸ひ差し

山峡のときれる辺り花明り

仔馬初めてつけし轡よ

*たそがれ清兵衛…山田洋次監督の映画

美 志 人 同 志 同 美 一

平成十四年十二月十一日 首尾
於 池袋 滝沢

暈 鰯

伴野 末季 捌

暈鰯焙るや動く目玉百

伴野末季

不器な男の集ふ寒明

中林あや

散る柏F1コースのまんなかに

山口美恵

衛星放送スイッチを入れ

中森美保子

名をつけた硝子の猫へ月の影

や

いただきものの酸漿の鉢

季

嫋々^ウと胡弓近寄る風の盆

保

ロシア娘は矢絰が合ふ

恵

解けぬわけ幾何の先生恋狂ひ

季

尻尾はどっちみみずうろちよろ

や

月高し三伏の森寝静まる

やっぱり怖いお仕置の蔵

ポケットをさぐれば当たるマツチ箱

ワインフェスタに派手な冬帽

湊町俄か通辞は牧師らし

岩波文庫みちづれの旅

満開の花銀ねずの空に染む

ふつくらとした春の里山

恵

保

や

季

恵

や

保

執筆

平成十四年二月十日 起首

平成十四年三月二日 満尾

小春かな

間瀬 芙美 捌

田から田へ鷺舞い移る小春かな

繁原敏女

姉妹集える炉開きの席

加藤治子

携帯は呼び出し音をオフにして

間瀬芙美

陽の遊びいる庭の水面に

谷本守江

立ちの月ならではと誘われ

黒木美代子

盃を出し菊の酒呑む

長坂節子

蟪蛄^ウはかなわずながら鎌を上げ

守

パズル解いてる君の横顔

節

唇付けにがんじがらめの恋の枷

同

手抜き料理が少しずつ増え

芙

旅支度文字の大きな時刻表

ポニーテールに白いTシャツ

OBの野外演奏丘に月

拉致報道に揺れる日本

お札手に家庭安全祈りつつ

泣き虫だった孫の入学

花の下壬生狂言はだんまりで

仔猫ひらりとせせらぎを跳ぶ

守

節

敏

節

美

敏

治

節

平成十四年十一月十九日 首尾
於 桜花学園大学

草の笛

松島アンズ 捌

くちびるは笑みのかたちや草の笛

松島 アンズ

広き水面に映る農鳥

梅田 利子

賑やかに十升の米炊きあげて

佛 渕 健 悟

運動靴のカラフルな子ら

下 鉢 清 子

古文書を開きし机覗く月

東 郁 子

いつの間にやら厠ひややか

悟

神鹿^ウの角切りを観る荷をひとつ

清

隣の席に誰か来る頃

利

ボンジュールすてきな彼に気もそぞろ

郁

K—1選手丸く抱かる

利

回轉扉まはれば出づる四次元

表通りを寒念仏ゆく

月冴ゆるさやつを斬らうか斬るまいか

児啼爺が隅の暗がり

赤ワイン葉代りに召し上げられ

着メロはオフ春眠の端

見はるかす花の雲なる雲珠桜

師の在す市遊ぶ永日

清 郁 悟 利 ズ 清 悟 郁 清

平成十四年五月十二日 首尾
於 柏市光ヶ丘近隣センター

たびら雪

松本

碧 捌

信楽の古刹迪ればたびら雪

松本 碧

水ひそやかに春浅き川

百武 冬乃

卒業の皆勤賞に拍手して

篠原 達子

慌てて履いたちぐはぐの靴

山口 美恵

月中天パントマイムは身じろがず

同 達

金木犀の匂ふ街角

達

晩学^ウの電子辞書引く爽やかに

乃 恵

ご指名多いインストラクター

乃 恵

逢引きの時刻はコイン投げて決め

乃 恵

三寒四温僕たちの仲

恵

海賊船舳先の天使笛吹きて

珍陀の酒を隠す酒蔵

八角形蜘蛛の巣越しに仰ぐ月

佃祭は路地も賑はふ

棟梁の仕方噺に眠くなり

無洗米など買つてみようか

大枝に揺るる鞆鞆花の午後

市民マラソン山笑ふ頃

達 碧 同 達 同 乃 恵 達

平成十四年二月十三日 首尾
於 池袋 滝沢

神馬

宮川 侂子 捌

元朝や神馬の手綱浄らかに

山田 歌子

淑気ただよふ杉の大木

宮川 侂子

遠足は農家のくらし学ぶとて

杉山 壽子

エスプレッソは惜春の味

歌

フルートのときにはフォルテ朧月

侂

朴齒下駄履く誰か行くらし

壽

繩文の壺の眞贋難しい

歌

斜め横向く男装麗人

侂

指で書く背中の謎を読み解きて

壽

絡みあひたる香水の揺れ

歌

絶壁に挑むザイルに命かけ

新車ポルシェが「若葉マーク」を

三角関数正弦余弦そぞろ寒

月にお供へ豆と地酒と

秋興に鳥の鳴き真似よく受ける

喜寿と傘寿に夢もふくらむ

飛花しきり風の道へとなだれこみ

光を返す和布干す浜

仇

壽

仇

歌

壽

歌

壽

仇

平成十四年二月二十七日 首尾

於 熱田神宮龍影閣

真夜の月

矢崎

藍 捌

友と見る真夜の星座や白い息

学生寮に紅葉散り敷く

液晶の画面にグラフ伸びゆきて

サクリと甘くパイは崩れし

外つ国の名も知らぬ町歩む月

透き通りゆく蝸の声

小田守る広き背中の頼もしく

待ち伏せしてる娘十八

帯するりほどけ落ちたる熱帯夜

阿国の扇子かざす海風

韓 雄 熙

鄭 文 成

矢 崎 藍

深 津 明 子

小 野 芳 梅 熙

福 井 直 子

熊 沢 京 子

明

熙

熙

鳥居まで賑い続く村の道

おんぶの背なで母におねだり

中東の石油利権はどこへゆく

さつま汁煮て蓋のかたかた

月寒し酔漢をよけ迷い猫

モラトリウムありパラサイトあり

無伴奏チェロ弾く弓の花吹雪

たてがみなびく牧の若駒

梅 藍 同 直 梅 明 直 梅

平成十四年十一月十九日 首尾
於 桜花学園大学

今朝の冬

山口佐喜子 捌

今朝の冬過ぎゆくものに影のあり

下 鉢 清 子

さざ波たたむ水鳥の湖

金 山 征 以 子

絵手紙に赤きフルーツ描かれて

石 井 淳 子

辞典開きて探す名称

吉 田 梨 江

劇場を出でて仰ぎし望の月

山 口 佐 喜 子

金木犀の香りほのかに

鉢

鯉^ウ肥るあたり静かに飛驒の秋

佐

円空佛と交す頬笑み

以

選び出す貴女好みのスカーフを

佐

ラストダンスの熱き抱擁

以

冷酒を呷るさみしき独り者

蛇の脱もぬけのてらてらと月

大道芸火の輪くぐりを上海に

F A 宣言松井注目

ナナハンに方向音痴の犬を乗せ

限定本を読んでうららか

熟うまい寝する嬰の帽子に花吹雪

夢は宇宙にふらこころを漕ぐ

淳 以 梨 鉢 梨 以 鉢 淳

平成十四年十一月七日 首尾
於 練馬区高野台地域集会所

蝮の裔

山口 美恵 捌

童顔の蝮の裔やローマ門

山口 美恵

猫背を伸ばす野茨の丘

中林 あや

新しい梯子の置き場決めかねて

菅原 紀彦

圧力釜の威勢よき音

恵

半月がそろりふくらむ宵の内

や

ナツプザックに穂芒を挿し

彦

地芝居の酔うてゐる客眠る客^ウ

や

浮かれどほしの時差ほけの鶏

恵

まじなひをプッシュボタンにかけておき

彦

理路整然と口説くA君

や

溜息は恋の勝者もそと漏らし

師走の尼が嵌る掘割

凍風のマイナス十度月仄か

最高潮のダンスパーティー

写真にはまだふさふさと残る髪

仔馬の名前やつと付けやる

花の果コートに響くホイッスル

どこかはんなり晩春の風

執筆 彦 恵 や 彦 恵 彦 恵

平成十四年六月二日 首尾
於 新宿 滝沢

雪 婆 ばんば

山崎 一恵 捌

ふはふはと三びき寄りぬ雪婆

梅田 利子

文士の村にもみぢ散り初む

山崎 一恵

下ろし立て躡取る手の弾みゐて

八角 澄子

ホームステイの碧眼の娘ら

利

満月の溢るる光り海は受け

恵

砂に秋思と戯れに書く

澄

残菊^ウの宴としゃれてもただふたり

利

新派悲劇の名優の所作

恵

みちのくの雲はどっかで見得を切る

澄

里の訛にひかれたる恋

利

ひと夜明け同棲話まとまりぬ

郭公が呼ぶ淡き残月

拉致されし母は六十路をとうに過ぎ

嘘でまろめて神佛なし

障害をひよいと乗り越え馬場馬術

ラッパ小脇に駆る少年

ほろ酔に唄もこぼるる花堤

先づ付き出しに香る青ぬた

澄 恵 利 澄 恵 利 澄 恵

平成十四年十一月二十日 首尾
於 大森 山崎家

木の芽晴

山本 要子 捌

積み荷終え紫煙くゆらす木の芽晴

山本 要子

鮎子漁へ運河行く船

生田目 常義

春火鉢灰をこんもり盛り上げて

松本 碧

焼き立てパンに並ぶ店先

池田 やすこ

小望月やっぱり兎のゐるやうな

水谷 紀明

露分けて行く谷の細道

こ

ポケットの勝ちべい独楽をにぎりしめ

義

幼なじみは宇宙飛行士

こ

窓越しの接吻残る映画史に

明

貧乏耳も口下手も好き

碧

底冷えの古都に声明響きゐて

金米糖は爆せて角出す

南蛮の羽根つき帽に暑き月

軽鴨親子ななめ横断

合併につぐ合併の大銀行

発車のベルの鳴り響く夜

飛鳥山蓼太一茶の花の夢

句座のどらかにめぐる盃

明 同 碧 要 義 明 義 碧

平成十四年三月二十三日 首尾
於 大倉山連句会

連句 14 蛍の光

小野 芳梅 捌

巖かに「蛍の光」風ぬくし

小野 芳梅

白木蓮の咲き初めし丘

竹内 たつ子

一人旅青春切符懐に

伊藤 良重

いつまでも嘯むシユガーレスガム

由川 慶子

海開きどつと繰り出すビキニ美女

重

もう放さない君に決定

梅

梢^ウもる月影さやか縁の端

た

貰い手のない荔枝^{レイシ}山積み

慶

ぜいたくに慣れた子供の好き嫌い

ガレージセール青空の下

厚着してパラリンピックのラジオ聞く

古裂を接いで作る小袋

花の山ころも句会は和やかに

八十八夜田に水を引く

重　　た　　慶　　重　　梅　　重

平成十四年三月十九日　首尾
於　桜花学園大学

表合せ八句 ささめ雪

塗椀の蓋のきっかりささめ雪

壺に一輪挿せる侘助

耳澄ませ遠き潮騒聞くならん

駱駝の背に揺れて来る姫

君恋へば回廊に射す月明し

いちじくの香の高き焼菓子

秋あかね匂玉管玉出でし穴

雲飛山の風の身に入む

秋元 正江 捌

秋元 正江

倉本 路子

橘 朱鷺子

浅賀 丁那

路

朱

江

那

平成十四年十二月十九日 首尾

発句　モヂリアーニの

秋元　正江

モヂリアーニの裸婦のまなざし春くるか

外套着てモヂリアーニの裸婦が好き

ルノアールの世界を出でて凍空に

枯木立アンリルソーの虎をおく

落葉焚く宙やシャガールの眸がそこに

ゴーギャンの森の夜明けや髪洗ふ

あ

と

が

き

猫蓑作品集第十三号をお届けいたします。

明雅先生には初校・念校とお目通し賜りましたこと、有難く厚く御礼申し上げます。

三月四日早朝より黄昏どきまで、柏市光ヶ丘近隣センターで校正に力を灌いで下さいました梅田利子・久保田庸子・桑原美津・八代嫺・吉村ゑみこ・山田喜美枝・吉藤とり子の諸氏に感謝申し上げます。

平成十五年三月四日

下 鉢 清 子

猫蓑作品集 Ⅻ

平成十五年四月吉日 発行

発行人 青木秀樹

発行所 猫蓑会

定価 二千円(送料別)

印刷所 株式会社 岩田印刷



